311
607

增野鼓雪著

眞實の信仰

始

特233
550

帝國圖書館藏

眞實の信仰

增野鼓雪著

昭和二三・六・一

序

神言を土臺として、教校に在職中、講義した原稿が其の儘殘つていたので、捨て去るのも忍びない所から發表することにしたのであるが、多少とも布教者や、教校の卒業生に益する所があれば、私しの希みは足るのである。

目次

一つの理……1
一つの道……104
一つの心……111

目次

序……1

第一章……10

第二章……14

眞實の信仰

增野道興著

□

凡そ人間の心には二つの働きがあるのであります。その一つは物を外側から見る働きでありまして、今一つは物の内側から見る働きであります。例へば人を見て其の人の顏や姿や形等を細かに見るのは、人を外側から見るのでありまして、斯うした見方をするのを知識と云ふのであります。今一つの内側から見るのは、見る人の心の内へ這入つて、其の心から其の人の言葉や行ひを知るのでありまして、斯うした心の働きを智慧とも直覺とも云ふのであります。

此の道で普通心と云はれたのは、内から外を見る心の働きの方でありまして、此の心の働きがなかつたならば、肉體の眼が如何に大きく開いて居ても、それは盲目も同じ事だと云はれたのであります。何故それが盲目であるかと申しますると、例へばお助けに行く場合、病人の樣子を見て衰弱して居るとか、息苦しそうだとか、食事が進まぬとか云ふ樣な、外から見て分る事を如何程詳しく知つたとて、其の病氣の起つて來る心の理が分らなかつたら、諭す事も心を直す事も出來ませんから、盲目が病氣を見て居るのも同樣になるのであります。

然らば其の心の眼を開くのには如何したらよいかと云ふ事になるのでありますが、是れは一寸には開かぬのであります。何故なら世界並から此の道へ這入つたのは、丁度赤兒が母の胎内から始めて此の世へ生れ出のと同じでありまして、その赤兒の眼は開いて居ても生れた時には何も見えんのであります。所が日が經つて成人して來れば自然に見え出し、三歳になれば六抵の事は見分け聞分けが出來る樣になります。それと同じで入信以來三年の月日が經過したら自

然に見分けが付く樣になり、又片言も云へる樣になるのであります。それ迄に大きい聲で講演だ說敎だと云ふて居ても、それは要するに赤兒が大きな聲で泣いて居るのも同じであります。

然し赤兒が物の見分けをする樣になる迄の間には、時々智慧熱が出たりする樣に、道の者が理の見分が出來る迄になるには、小さい悟り卽ち心が幾度も變らねばならぬのであります。皆樣も道を通る間に何べんも心が變らねば心が進んだとは云へぬ。然らば如何したらそれが變るかと申しますと、現在自分の心に浮んで來る事と、過去に於いて心に浮んだ事とを較べて見るのであります。そして其の間に大きい違ひがあれば心が進んで居るので、同じであれば心が進んで居ないのであります。

左樣して段々進んで心が變つたら、此の世が變つて來るのであります。神樂歌に世直りと云ふ言葉がありますが、あの言葉が分らずに困つて私しは深く考へた事があります。世の中が變ればそれこそ大變であると云ふ所から、是れは自分の心が變る事だと云ふ事が分り、終ひには

甘露臺の建設の世も、要するに自分の心が澄み切つたら、直ちに現はれるものだと云ふ事を悟つたのであります。

何故なら自分が人の爲になる事や人の喜ぶ事をして置けば、此の世が面白くなるけれども、人の困る事や人を苦しめる事をして置けば、同じ此の世が苦しい所に見えて來るから、此の世を極樂の國と見やうと思ふたら、人の爲め世の爲めに働くより外ないと云ふ事が分つたからであります。それ以來私しは此の世は最も好い所だと思ふ樣になりました。

斯樣に心が一つ變れば變つただけ、此の世が變つて來るのでありますから、我が心を變へて行く事が此の世を變へる事になるのであります。其處で御道と云ふのは其の心の變つて行く所にあるのでありまして教會や話にあるのでありません。

又此の道をお道と云ふ以上心が通るべきもので、若し心の進むと云ふ事がなかつたら道の用はないのであります。そして又心が道を歩るいて居る以上、其の景色が變つて來なければならぬ筈のものです。若し心に見える景色が變らぬと云ふのならば、其の人は道を歩るいて居ない事を意味して居るのであります。歩く以上景色が變るのが當然で、例へば大和から歩るいて山を越えたら大阪が見えるやうなものであります。それが變らぬのは心が立ち止まつて居るのでそうした人を神樣は道ばたの大木と仰せられたのであります。

斯うして心が進めば次第に理が分るやうになつて來るのであります。即ち理の世界に入る事が出來て、日々天の理を樂しみ暮す事が出來るので、是れが神樣の仰せられる心の働きを云ふのであります。

□

荒木と云ふのは山から切り出して來た其の儘の木を云ふのであります。山から切り出したま

まの木は、枝が殘つて居たり皮が摩り剝けてあつたりして、一見した所甚だ見惡いものであります。それと同じ樣に世界並から始めて此の道へ這入つて來た人の心は此の荒木と同じです何故なら世界で我儘氣儘に成長して來たのであるから、それは木が山で繁つて居たのと同じであります。所が枝を拂はれたり幹を切られたりして、山から切り出されるのであるが、殘つた枝が如何かするとひつかゝる樣に何處かに角が多いのであります。

御承知の通り只今では御本部から出る御供は洗米になつて居ますが、以前は金米糖が三粒はいつて居たのであります。所が世界から金米糖の中へモルヒネを入れて置くと云ふ非難があつたので後に洗米に變へられたのです。然し始めは金米糖であつたので、それは如何云ふ譯から出來たかと申しますると、御教祖は常に其の金米糖を膝下に置いて、來た人々に與へられた所から始まつたのであります。

それを教祖が人にお與へになる時斯うお諭しになつたのであります。人間の心と云ふのは丁

度此の金米糖の樣なもので角が澤山あるで、其の角の間へ埃が溜まるのやで、そこでそれを口へ入れて溫みと水氣とで溶かしたならば、其の角が取れて丸ふなるのやと申された、これは世界並の人も此の道へ這入つて神樣の教を聞いたら、何時とはなして其の角々した所が無くなつて右へでも左へでも自由に轉がる、丸い心になる事が出來るからであります。そして心が丸うなつたら人と爭ふ樣な事はせなくなるから、安らかな心持ちで暮せるのであります。

それと同じて荒木も山から切り出した時は見惡いものであるが、其の木を大工が手にかけて惡い所は切り取つて行けば次第に柱の形が出來、それからかんなをかけて行くと木の目が美くしう現はれ、終いに上かんなをかける樣になれば木から艶が出て來るのであります。故に如何な人間でも見捨てる事なく仕込んで行きさへしたら、其の人相應の柱になつて來るのであります。それを神樣は如何な見惡い木でも、段々手をかけて行つたら後には柱として、十分間に合ふ樣になつて來ると仰せられたのであります。

斯うして荒木が柱になつて來るのでありますが、此の場合柱の身になつたら非常につらい修業であります。此の修業に這入つて居る時は、如何な好い事を考へ付いても如何な善い事をしても、それは思ふ通りにならぬのであります。手を出せば手を切られ足を出せは足を切られると云ふ樣な有樣であります。けれども此の神の手入れを得なければ柱になれぬので、柱になりさへしたならば今度は神樣が添ふてお働き下さるから、思ふ事が皆な成り立つて來るのであります。だから何んでも其所まで行かねばなりません。

所が多くの人は其の修業に堪え兼ねて道から離れて行くのであります。それでは柱となる事は出來ないのであります。又た自分が柱になる所まで進んで道かなければ、人々を柱にする事が出來ないのです。何故なら自分の通つただけの道より說く事が出來ないからであります。そして柱さへ作つて置けば心の倒れる時に突張りとなつて、自分が助かるのであります。故に葉の樣な信徒を多く作るよりも、數は少なくとも柱を作る事に心がけねばならぬのであります。

□

治めると云ふことは甚だ大切な事でありますが、此の治めると云ふ事には二つあるのであります。其の一つは人間の心を治めて事が惡るくならない前に治めるのと、今一つは事が惡るくなつてから治めるのとであります。例へば是れを一家の事情に付いて申しましたら、一家に嫁と姑があつて互ひに仲惡るく治まらないとする。此の場合に二人の者に天の理を說き聞かして互ひに懺悔させ仲好くさすのは一つの治め方である。所が仲の惡るいのは仕方がない話してやつても聞かないと云ふので捨てゝ置くと、互ひに其の間の爭ひが激しくなる。左樣なつたら神樣の仰せられたもつれ繩〳〵もつれ切つたら切れるより仕方がないやうに、二人の中何れかゞ

息の根が切れて死なねばならぬやうになるのであります。

爭ふ者の内一人が死んだら、其の後は爭ふ相手がないのであるから自然治まる道理である。然し斯うした治まり方をするのなら、何にも信仰は要らぬのであつて、左樣した悲劇が起らぬ樣に治めてこそ、信仰が必要になるのでありますから、それには力を入れてやらねばならぬのであります。捨て置いたならば必らず衝突して來るから、それを防ぐのが大難は小難で助かる道となるのであります。

是れは要するに一家の上から云ふたのでありますが、其の他に付ても互に反目する者があつたら斯うした事は起つて來るのであります。又捨てゝ置いても其の後繼者等が、自然に心付いて來るのでありますが、それでは道とは云へぬのであります。又個人の心に附いても力を入れて敎導してやれば心が治まつて來るが、捨てゝ置いたら必らず先で失敗して、それからでなければ悟れぬやうになるのであります。それを力入れて治まる力入れなんだら治まらんと仰せら

れたのであります。

然し是の理は今一つ反對の意味からも取れるのであります。それは自分の心が不安であるとか我が家に治まらぬとか云ふ場合に、神樣のなさる事に力を入れたら、我が心なり我が家なりの治まりが付くが、神樣の事に力を入れなんだら、我が身我が家が治まらんと云ふ事にもなるのであります。故に要する所上に對しても下に對しても、力を入れたらそれだけ治まるので、力を入れなんだらそれだけ治まらんと云ふ事になるのであります。

□

空が晴れやうとしても雲が現はれる樣に、人間の心も、晴々した氣持で居たいと思ふても、何時とはなしに心の雲が出て曇らしてしもうのであります。朝起きて氣持ちが好かつたのに、

人に一寸した事を云はれたので氣が惡るくなつたとか、氣に入らぬものを見たので、心持ちが惡るくなつたと云ふ樣なのは、總て皆な心の曇りとなるのであります。

其の心の曇りを拂ふのが、卽ち此の道であるが、斯うした一寸した心の曇りは、時が過ぎるとか他に氣を移すとかすれば、直ぐに拂へるのでありますが、外からかゝる雲ではなく、內からかゝる雲は容易に晴らす事が出來ぬのであります。それは如何云ふ譯であるかと申しまする と、自分は直ぐ腹を立てる性分だとか、心配をする性分だとか云ふのは、是れは埃だからと云ふて拂つたと思つても、直ぐ其の後から心に現はれて來るのであります。そしてそれは自分が眞實にならう、心を澄そうと勤むれば勤むる程、其の取れないのが段々分つて來るのであります。

それは物に例へましたら、鏡の上の埃と鏡の中に映つて居る姿の樣なものであります。鏡の上の埃は拭けば直ぐ無くなるのでありますが、鏡の中に映つて居る姿は、拭いたとて拂つたと

て取れるものではありません。拭いて無くなつたと思つても、その後にちやんと其の姿が殘つて居るのであります。それを因緣の心と云ふので、其の姿を取るのには映つて居る其の實物を取り去つたならば、其の姿が消えるのであります。其の實物を取り去るのを因緣報じとも因緣果たしとも云ふのであります。

尙ほ之れと實際上で云ひますと、土地とか家屋とかを買いたいと思ふ、所がそんな事をしてはよく無いから止め樣と思つても、直ぐ買いたい心が湧いて來る。そこで何故斯う云ふ買ひたい心が出て來るのであるかと、我が心を深く尋ねてみると、其の奧には金を持つて居ると云ふ事實があるのであります。所が損をしたとか使へない樣になるとかすると、自然買ひたいと云ふ心が無くなつて來るのであります。故に因緣の心の奧には必らず其の心を出さすものが隱れてゐるのであります。

斯う云ふ譯でありますから、本當の事を云へば因緣がある間は、如何に一心になつて自分の

心を澄そうとしても、それは不可能の事であります。故に自分の心を眞に晴そうと云ふのなら、何よりも先づ其の姿を宿すものから取り去つて行かねばならぬので、それは一時に出來る事でない。それを一ぺんに晴そうとしたとて、あちらこちらから雲が出て來ると敎へられたのであります。

□

新たに此の道に這入つた人は、大抵は自分の惡因緣を自覺して此の信仰に這入たのでありますが、惡因緣の自覺のみでは何んの價値もないのであります。何故なら惡因緣の自覺と云ふのは例へば身體に垢が積つて居る事を知つたのと同じで、垢の積つた事を知つたのみでは何んの甲斐もないのであります。其の垢を湯に入つて洗ひ落すので、垢の積つてあるのを知る必要が

あるのであります。故に心を洗ふ爲めに因緣の自覺が必要になつて來るのであります。其の惡因緣を切つて頂いて白因緣になりたいと思ふ所に、なんでもと云ふ心が出て來るのであります。

右の樣に申しますると惡因緣と白因緣が、ちやんと定まつてある樣に思はれますが、是れは決して明らかな區域のあるものではありません。例へば暑い寒いと云ふのと同じで、何度から上が暑いのやら何度から下が寒いのやら分らないのと同じであります。卽ち其の間がぼかされて居るのであります。それは夜と晝との區別が何處から出來ると云ふ事なしに、朝は薄明に依り夜は夕闇に依つてぼかされて居るのと同じであります。然し赤と白との間がぼかされて居ても、一方は赤であり一方は白である樣に、因緣も一方は惡い事が出て來る惡因緣で、一方は好き事が出て來る白因緣となるのであります。

そこで惡因緣から白因緣に變つて行くのにも、明らかな區別がないのであるから、今日から變ると云ふ樣な譯には行かぬのであります。丁度溫度が上つて行く樣に、日々好い事をして好

い因緣を造り、最後には教祖の白因緣に結び付けて頂く樣に、なんでもと云ふ心になつて進んで行かねばならぬのであります。

そこで此の何んでもと云ふ心が起つたならばそれは實に强いものであります。御神樂歌の中に深い心があるならば誰れも留めるやない程にと仰せられて居る。其の深い心と云ふのは是れで、卽ち人間の心の奥から出て來る心であります。此の心は帝王の權力を以つてしても國家の力を以つてしても、動かす事の出來ん强い力なのであります。これを昔では卑夫の志も奪ふべからずと云ふて居るのであります。從つて神樣も其の心があれば、決してお止めになる樣な事はないのであります。況んや人が止めるなど云ふ事は無い筈であります。

然るに事實として自分は信仰をするつもりであるが、親が反對しますからとか親族が喧しく云ひますとか云ふて、信仰を止める人がありますが、是れは深い心がないからであります。尙ほ今少し突込んで云へば、人が他人に相談せなければならんと云ふのは、困つた時に其の人の

助けを乞ひたいからであつて、自分が失敗して難儀しても、決して他人に迷惑はかけないと云ふ自信さへあれば、決して人は小言を云ふべきものではありません。何んとか云はれると云ふのは自分の心に弱い所があるか、卑しい所があるからであります。

すれば何にが自分の深い心を止めるのであるかと云ふと、自分の心であります。卽ち人間が思案したり心配をしたりする所から、困りはせなからうか難儀はせなかろうかと思ふ心が、自分の深き心を止めるのであります。若し人間の心から此の案じの心が取れたら、それこそ如何な心も定められるのであります。何故なら自分の心で定める事なら、萬人の人を助けると云ふ心でも定められるが、そんな事が出來るものかと思ふ心が、知らぬ間に自分の心を止めて居るのであります。故に要するに人間には眞實の心と僞りの心と二つあつて、常に心の中で爭ふて居る樣なものであります。深い心卽ち眞實の心の勝つ人は、神の世界に近づく事が出來るが、淺い心卽ち僞りの心の多い人は常に苦しんで通らなければならぬのであります。

そこで何んでもと云ふ心は困難や難儀があれば、止めると云ふのではなんでもと云ふ心には
なれません。例へ如何なる苦しい事に出合ふても悲しい事に出合ふても、それに敗けずに飽く
迄進んで、思ふ事を成し上げて行くと云ふのがなんでもと云ふ心であります。神様は擔任變更
の場合に後任者に理が無い時には、大抵はなんでもと云ふ心に許し置こうと仰せられます。理
が無くとも其の心さへあれば理が次いで行けるからであります。所が多くは人に許された如く
に思つて、なんでもと云ふ心を失ふから理が消えるのであります。

神様は人間の心を足場として働くと仰せになつて居ります。すれば人間の心が弱かつたら足
場が弱いので、弱い足場の上では職人が自由に働く事の出来ないやうに、神様も自由の御働き
をして下さる事が出來ないのであります。故に神様の自由のお働きをして頂くのには、人間の
心の足場を強うして置かなければならぬのであります。所が人間は人の云ふ事や人の思惑を象
ねたり、先案じをしたりして強い心を定める事が出來ない。それで神様が足場にのつてためし

にかけて見られると、直ぐ足場が壞れたり曲んだりするから、神様の働きが無くなつて來るの
であります。それに人間は自分の心の定まらぬ事は思はずに、神様の御守護のない事ばかり云
ふて居るのであります。

左様かと云ふて今直ぐにそれでは強い足場を造らうと云ふて出來るものではありません。や
はり年限を重ねて造り上げるから、強いものが出來るのであります。だから何んでもと云ふ心
があつたら、必らず何時か此の足場が出來て、神様の自由自在の御働きを受け得られるやうに
なるのであるから、此の心を忘れぬやうにして進んで行かねばならぬのであります。

□

人間が自分の心から自分の眞實を押へて居る事は澤山あるが、其の中でも最も自分の眞實心

を弱めるものは先案じである、先案じと云ふのは自分の行く末に付いて案じる心であつて、人に依れば一年二年の先を案じるのみならず、十年も二十年も先の事まで心に懸けて心配して居るのである。其の心配がある爲めに人間は眞實の心になれぬのであります。

近い例で申しましたら來年の春が來たら、夏近くなるから夏衣の準備をせなければならぬ。秋になれば冬近くなるから、冬衣の仕度をせなければならぬと云ふ風に、それからそれへと先の事を案じるが、此の心がある以上如何しても眞實の心を治める事が出來ないのであります。同時に又神樣の御助けも頂けないのであります。

何故なら案じると云ふ事は、神樣を信仰する事とは兩立せないからであります。卽ち是れを平たく申しますれば神樣は如何なるお力をも御持になつて居る、人間に不自由をさそうと云ふ思召しが無いと云ふ事を、本當に心から信じて居たならば、先案じなど心に湧いて來べき筈のものではありません。然るに先案じをすると云ふのは、意識的には神樣のお力を疑ふて居る譯

ではありませんが、それは理として疑ふて居る事になるのであります。神樣を疑ひながら神樣の御助けを頂かうと云ふのは大きい矛盾であります。

今假りに神樣の御心となつて見ても、疑はれながらお助けなさる樣な事はありさうな筈がありません。人間でも其の人を賴りにして心から賴むから、助けもすれば世話もするのでありまして、賴み甲斐がないと云ふ樣な淺薄な心で賴まれては、世話も助けも出來るものではありません。所が先案じをして居ると云ふ事は、神樣を賴み甲斐ないと思ふ心が心の何處かにあるから出て來るのであつて、其の心がある以上人の心を見通しの神樣として御助けになる道理がありません。それのみか案じる心はその心通りの守護をせられるから、却つて案じなければならぬ樣な事が續出して來るのであります。それを神樣は案じたら案じの理が廻つると仰せになつたのであります。故に如何しても案ぜずに信賴して行なければならぬのであります。

或る時斯う云ふ病人が私を尋ねて來ました。其の人は肺病で一度神樣の御助けを頂いたので

ありますが、再び惡るくなつて來たので教會で話を聞いたが如何しても助からない。それで會長と共に私しを尋ねて來たのであります。私しは其の病人に貴樣は神樣の御助けを頂けると思ふかと尋ねたら、今度は六ヶ敷いと思ふと云ふ答へでありました。神樣が助けて下さらぬと思ふのならば、そんな賴りない神樣を信仰する必要もなければ、話を聞く必要もないからお歸りなさいと申しました。所がいや神樣は御助け下さるが、私しに助かる心がないから左樣申し上げたのですと云ひ換へました。それでは神樣は心通りの守護と仰せられるのですから、神樣が助けて下さると思へる樣にしたら好いでしようと申しました。所がそれが病人には分らない。それで私しは更らに斯うすれば神樣も捨てゝ置く譯には行かん、助けずには置かれんと云ふ事をしたならば好いでしようと申しましたら、それで分つたと云ふて歸りました。其の後暫らくして病氣が全快したと云ふ通知がありました。

是れは要するに神樣の力を絶對に信仰する心になつたからであります。之れと反對に或る商

家の夫婦の間に子があつて肺病になつた、それで商賣を止め神樣の御用をさして貰へと諭したが如何しても聞かない。終ひに子に迫られて商賣を止めたが、心の心配の無い樣にと先の用心をして止めたのです。所が子供は大變喜んで三日目に死んだのであります。是れは事情は違んだが心が神樣を眞實から信仰して居なかつたから、子供は死んで助かつたが、親は苦しみを殘したのであります。

死んで助かるとは變に聞へまするが、死んで助かる場合が澤山あるのであります。神樣も修覆の出來る間は助けて下さるが、修覆が出來なくなれば衣物を着替へさすと仰せになつて居るのであります。强病に罹つて人に笑はれて因緣報じをして居る者は、眞實の懺悔が出來たら神樣は向ひ取られるのであります。それが死んで助かると云ふのであります。要するに子の死は親の先案じから起つて居るのであります。故に心に先案じのある間はそれは未だ信仰が出來て居るとは云へぬのであります。それで神樣は先案じの心はすつきりいらんと仰せになつたので

あります。

それから今一つ人に依ると清い水の中なら心を澄す事が出來るが、埃の中では心を澄す事は出來ん。自分は澄す氣であつても、傍の者が心を濁らすから澄されんと云ふのでありますが、是れが又大變な間違であります。

何故なら人が自分に埃な事を聞かしたり見せたりするのは、人が云ふて居るのでなく自分の心にそれを聞かねばならぬ因緣があるからであります。故に神樣は人の埃が見える間は我が心に埃があるのだと思へと仰せになつて居ります。是れは丁度憐りの家の障子の破れが見えるのは、我が家の障子が破れて居るから見えるのと同じであります。

だから心の埃を拂ふて德を積んで行つたら、埃な事を見たり聞いたりせずに濟む樣になるのであります。例へば德のある人の前へ出たら埃な事を云はうと思ふて居ても、斯んな事を云ふたら何んと思はれるだらうと云ふ心が先に立つて、口まで出懸けて居ても言ひ出さずに濟すやうなものであります。又た德が付けば其の人に斯んな事を云て心配さしてはならんと、向ふから聞かしも見せもせぬ樣にするのであります。然るに埃な事を見聞きせなければならぬと云ふのは、自分の心にそれを好む理卽ち因緣があるからであります。

ですから如何に草の中の樣な埃の中に居ても、自分の心さへ澄んだならば、天の理が自然に働いて來るのであるから、斯んな中では心が澄されんとか心が汚れるとか思はずに、神樣の仰せを信じて心を定めねばならぬのであります。

□

此の世の中に存在するものは、人間の眼から見て變らぬと思ふて居るものでも、長い年限から見直したら皆變化をして居るものであります。その變化するものゝ內にあつて、變化せない

ものは天理であります。形のあるものは凡て變化するが、天理は昔から變つた事が無いのであります。多くの人は此の常に變化極りなき物を頼とするから、眞の安心が出來ないのでありまして、此の變らぬ天理にさへ凭れて通つたら眞の安心が出來るのであります。

然らば其の天理とは如何云うものであるかと申しますると、それは神樣の御思召しが働いたのを云ふのであります、我々が安心の出來る末代と云ふ道を通らして貰ふには、此の天理に添ふた道を通らねばならぬのであります。それには自分の心の働きが、此の天の理と行き合つて行かねばならぬので、其の理が行き合ふと云ふのには、心そのものが神樣の思召と一致して居なければならぬのであります。之を云ひ換へますれば神樣の思召と人間の心が一致して居るから、其の理が行き合ふて來るので末代の道が通れるのであります。

所が此の理が合はなかつたら、末代の道が通れぬのみならず助けさへ頂けぬのであります。何故なら神樣は人間助けたいと云ふ思召であり、人間は助けて貰ひたい心であつても、理が行

き違ふから助ける事も助かる事も出來なくなるのであります。それを御手振りに於いて心得違ひと云ふ場合に、手を行き違はす樣なもので是れが合へば助かるのであります。

そこで此の天の理と心の理とが合つて居たならば、自分の生死に拘らず天の理は働くのでありますから、我れ即ち天理で、天理の働く間我れは生きて行けるのであります。即ち理に於いて生きる事に依つて、我々は久遠に生き得る事が出來る譯であります。

御教祖は姿は人間であつたが其の心へは、神樣が入り込んで居られたのでありますから、教祖の思はれる所欲せられる處は皆神樣の思召しであります。故に山伏等が白刃を持つて教祖に迫つた時に、神は理や理が神や、神は切れよふまると仰せになつた。是れは教祖の肉體は切れても教祖の心で働いて居る神即ち理は、切る事は出來まると仰せられたのであります。故に教祖は既でに其の肉體は御返しになつて居りまするが、此の世に天理の存在する間久遠に教祖は生きて居られるのであります。

其の教祖に我々は御供をして行くのでありますから、即ち我々は末代の理を通るのであります。更らに是れを教理の上から考へましても、人間は神樣に始めて御造りを頂いて以來、生れ變り死に變りして今の世に生れさして頂いて居るのであつて、又死んでは生れ變つて來なければならぬのであります。神樣も仰せられた通り魂は生き通しであるから、此の生き通しの理で末代の道を通つて行かねならぬのであります。

然るに此の道に這入つて居ながら、中途にして信仰を止めたり世界へ流れて行く人がありますが、是れは此の道に附いて來るのを恐がつたからであります。恐いと云ふのはつまり難儀はしとみない苦しみは通りたくないと云ふ心から出て來るのでありまして、此の心が出たらそれは神樣の道が通れんのは當然であります。何故なら神樣の道は未だ人間の通つた事のない始めての道でありますから、通り苦いのがあたりまへであります。

けれども其の苦しい中やつらい中を通つて、始めて惡因緣が切れて來るのであります。故に

惡因緣の出て來るのを恐れて、それを回避するのは決して信仰とは云へないのであります。御教祖も五十年御苦勞下され、其の傳記も出來て居りまするが、あれは表面の事のみで眞の教祖の御苦勞は現れて居ません。何故なら口で云へる事や話の出來る事は、眞の苦しみではないからであります。然るにそれを教祖はぢつと辛捧して御通り下されたので、その理に依つて人々は助けられるのであります。

故に如何なる惡因緣が出來てもそれを回避する爲めに、布教に出たりしてはならんのであります。其苦勞の中にあつて其の苦しみを心でぢつと味ふて居る所に、人を助けさして貰ふ理が見えるのであります、是れを回避して人を助けると云ふ事は事實に於いて出來ない事であります。

それ故に如何なる事も恐れん樣な心にならなければならぬのであります。と云ふて此の心は出そうと云ふて出ず、出そまいと云ふても出來るものであります。けれども要する所恐い怖しいと云ふのは外にあるのではなく、皆我が中にあるのであります。即ち世の中のものが恐ろし

いと云ふのでなく、恐ろしいと云ふのは我が心が恐ろしいのであります。

例へて云へば講演をする樣な場合、自分に準備があればそれは恐い事ではないが、我が心に準備がなかつたらそれが恐ろしい樣に思はれるのと同じであります。されば恐いと云ふものがあれば、何かそれに對して正しくない心を持つて居るからであります。卽ち我が心の理が表に現れて、我れを恐ろしがらすのであつて、外にあるのではないのであります。

其れ故自分の心から不純の心卽ち正しくない心を捨てると云ふのが、恐いと思ふ心を取るのであつて、それが卽ち眞の心であります。だから是れを一言で云へば神樣は眞が神と仰せられた如く、我が心が眞になつたら恐ろしいと云ふ心も消えて行くし、又眞であつたら天理に添ふた心であるから、末代と云ふ道が通れると云ふ事になるのであります。それと反對に心が眞でなかつたら恐い怖ろしい事が澤山現れて來て、末代まで續いてある此の道を通る事が出來なくなる譯であります。されば恐いと云ふ心が出たなら、深く自分の心を反省して其所に恐ろしがらす理を探し出し、それから懺悔をして行かねばなりません。

□

仕樣と思ふてもならん仕樣まいと思ふてもなつて來ると云ふのは、卽ち因緣の事を仰せられるのであります。私しの知人に我子を勉强さす爲めに東京へ遣つて居る人があります、所が其の子が勉强せずに芝居ばかり見に行つて學校は落第ばかりして居る。それで其の親が大變怒つて居るのでありますが、因緣から考へると其の子は前生に於いて芝居が好きであつたので、其の理を持ち越して來て居るのであります。

是れなど親の仕樣と思ふている事と、反對の結果が現れて來て居るのであります。又た世の中には誰一人として難儀したい貧乏したいと思ふ者はないのであります。然るに世の中の多大數

の人は、其の望まん苦しみを嘗めて居るのであります。是れが卽ち因緣でありまして。それを世界では世の中は思ふ通りにならぬ、思ふ樣にならぬのが世の中だと云つて居るのであります。

そこで神樣は十のものなら九つまで敎へて來た、あと一つの道を敎へるのやと仰せになつた。それは世の中の人が苦しんで居るのは、思ふ事が思ふ通りにならぬから苦しんで居るので、思ふ通りになれば苦しみがない、それで自由用と云ふ理を敎へると仰せられたのであります。

所が世界から見ると多くは思ふ事がならんのであります。然し理の上から考へて見たらば、それは出來んのが當り前で、仕樣と思ふ事が出來るのは却つて間違つて居るのであります。それ故に神樣も人間の思ふ心は皆違ふでなとも仰せられて居るので、それは出來んから思ふのであります。

尙ほ是れをよく分る樣に例に依つて申しましたら、私しが敎會を持つた時に何んでも榮えさしたいと思ふたのであります。それで私しは出來るだけ熱心に好い敎理を說いたのであります。

所が私しが好い敎理を說けば說く程、人々が私しから遠去かつて行くのであります。それで私しは是れは自分が未だ敎へ足らぬのであると思ふて、更らに好い事を考へて好い敎へを說いたのであります。然るに事實はやはり反對の結果より見る事が出來ませんので、私しは其の時考へました。

其の時私しは斯う云ふ事を發見しました。それは私しが好い敎理を說く其の心の奧には、人の惡るい所を見て居たと云ふ事であります。卽ち私しが人の惡點を見て居たから、其の缺點を直さうと云ふ心が、私しをして好い敎理を說かして居たのであります。所が神樣は人間の言葉や思案に守護せられるのでなくて、心通りの守護をせられるのでありますから、私しが人の缺點を見て居る心通りの守護をせられたから、信徒が勇まなかつたのであります。

其の事が分つてから私しは成るべく敎理を說かない樣にすると共に、人は如何なつてもかまはぬと捨てゝ置いたのであります。所がそれ以來信徒が勇んで來るやうになりました。是れは

人間から考へましたら不熱心の樣に思はれますが、却つてそれが人を助けて居るのであります。何故なら私しが缺點を見て居た間は、知らず〳〵人を攻めて居たのであつて、捨てゝ置いたのは私しが人を助けて居た事になるのであります。

斯う云ふ事は御助けの場合にも澤山ある事であります。實際の經驗から申しましても是非助けねばならぬと思ふ時は助からぬのであります。斯う云ふと人を助けるのが眞の誠ではないか、それに人を助けやうと思ふて助からぬのは分らぬと思はれるかも知れませぬが、事實に於いて此の人を助け樣と思ふ時は助からぬのであります。何故なら助けなければならぬと云ふのには、其所に何か特別の因緣があるからであります。所がそれは多くの場合不純な心から出て來るのでありますからそれが助からぬのであります。それと反對に是の人等は助かつても如何でも好いと云ふ心で、お助けをした場合は必らず助かるのであります。是れは一寸考へたら非常に薄情な樣に思はれますが、其の薄情と思はれる所に正しい天の理が現はれて來るのであります。

故にあまり心を使ひ過ぎたり考へたりして仕樣と思つた事は、却つて出來なくなつて來るものであります。

更らに此の事を今一つ例で申しましたら病氣を助けて頂いたとか、何か心定めの爲に御禮を神樣に差し上げ樣と決心したとする。所がさて出す段になつてそれだけ出すのが惜しくなつて、半分だけ出して置くとする。それを多くの人は半分だけ神樣に御供へしたと思ふて居る。所が神樣は御供へした半分の理も御受取りになるのは勿論、心の内で引き去た半分も御受け取りになつて居るのであります。すると半分出して半分引いたのでありますから、其の結果は零になつて居る筈であります、然し人間は左樣は思はないで出した方ばかり思ふて、今に神樣の守護がありだらうと待つのでありますが、それは何時迄待つても守護が現はれて來さうな筈がありません。

斯樣に人間は我が心の出て來る奥を見極めないから、思ふ事が成らんと云ふて此世に不足を付けたり、思はぬ事が出來て來ると云ふて怨んだりせなければならぬのであります。ですから

道を通る以上は外の事は心にかけず、心に出て來る眞の理を究めて行かなければならない。布教をする樣な場合にも外に向つて我々が進むよりも、先づ自分の内を深く極め、その心の奥から正しうして行かねばならぬのであります。自分がやれば何んでも直ぐ出來ると思ふ樣な心ではめつたに出來んのであります。如何なつても神樣の思召し通りの道を通ると云ふ心に、神樣は守護せられるのであります。さうして出來たものならば心を苦しめる事はありませんが、無理に作つたら其の無理の爲めに、我が心が苦しんで行かなければなりません。

□

道と云ふものは切れ目や絶え目があつては、道としての用をなさんのであります。例へば京都へ行く道に於いて、京都まで其の道が續いてゐずに、奈良とか加茂で道が無くなつて居れば、

其の道は何の役にも立たんのであります。又東京へ行くにしましても名古屋とか靜岡とかで、其の道が切れて居つたら、是れまた用をなさんのであります。故に要する所其の目的の地まで續いて居らなければならんのであります。

是れは目に見える人の歩るく道で云つたのでありますが、心の道に於いても其の目的地まで切れずに續いて居なければ、心の道にはならんのであります。すれば心の道の目的地は何處であるかと云ふに、是れは人間心から眞實の心になる道で、卽ち神樣の御膝下まで行かなければならんのであります。それには神一條の道と教祖が仰せられた處の、八つの道筋卽ち山坂から劍の中や火の中を通つて、本道に出る道筋を通らねばなりません。その道筋に切れ目や絶え間があつては、眞の道にはならないのであります。

所が多くの人の中には、始めの間は一心になつて通つて見るが、少し苦しい事があるとか、自分の思ふ樣にならぬとかすると、直ぐ心をいづまして道を止めてしまひ、二三年して神樣の

御手入れを受け、心を取り直しては又道を通り始める。斯う云ふ風に幾度となく繰り返へして年限を重ねて居る人がありますが、斯う云ふ人は道の年限は如何に古くても、それは何んの理にも無つて居ないのであります。

それを例へたならば丁度糸の様なものであります。糸と云ふものは長く續いてゐるから、糸の用をするので、其の糸を一尺とか二尺とかに短かく切つたならば、充分糸の用をする事が出來ない。道も其の通りで始めては止め、始めては止めして居る様では、何時までたつても効能を積む事は出來ないのであります。

教會に於いて道が盛んにならんとか、信者が思ふ様に出來ぬと云ふのは、要するに會長なり所長なりが、心の道を通つてゐないからであります。即ち表面に於いては教會をやつて居るのであるから、お道を通つて居る様に見えますが、其の心で神様に近づく道を通つて居ないのであります。例へば京都へ行くと連れて出て、奈良か加茂あたりまでは連れて行つて、其の先

を伴れて行かないから、信徒が後へ歸つてしまふのである。故に先に立つ者が先づ自分が道を通つて、後々を案内をするだけの覺悟があつて進んで行つたら、教會は自然に發展して來るのであります。

それから又斯う云ふ風に、熱心から間違つて道の邪魔をして居る人があります。それは前へ進んで行くべき所を、熱心のあまり道の眞中で後を向いて、早やく歩るかねばならぬ、一心にならねばならぬと、人にばかり注意して居つて、自分は神様と反對の方へ進んで行く人があります。是れは知らず〳〵道の邪魔をして居るのでありますから、斯う云ふ人は早やく其の向きを變へて、人が來やうが來まいが、是の道は先づ自分が歩るかねばならぬのだと、自分さへ進んで行つたら、必らず人は道に付いて來るものであります。

兎に角道と云ふものは表でも裏でも續いて行かなければならぬので、一家の上に於いたら、親から子、子から孫と、代々續いて居なければならず、教會に於いても又た其の通りでありま

す。何故なら天候と云ふものは、昔から變つたとか違つたとか云ふ事はないので、其の理が卽ち道であるから、道に變りや絕え目は無い筈のものであります。然るに絕え目や切れ目の出來ると云ふのは、それは人間の心が道を正しく踏まんからであります。道さへ正しく踏んで居れば、末代までも續いて行くべき筈のものであります。

□

此の道は神の御心から出來て來た道であるから、此の道を信仰する者は神樣の御心に添ふて行かねばならぬのであります。何故なら信じると云ふのは、我が心では此の世を通る事の出來ない事が分つたから、神樣の道に入れて貰つたので、此の道を通る以上、神樣の御心に從ふのが當り前であります。それ故此の道に於いては百人千人の人が集まつても、皆な神樣の心を我が

心として治まつて行くのであります。

其所で神樣の心を我が心として行くには、其の間に幾度もの經驗が入るのであります。だが入信の動機如何に依つては、精神的の飛躍をして直ちに神の心を我が心とする人もあります。然し兎に角神樣の心を漸次我が心に移して行く事が信仰の道筋でありますから、神樣の御言葉である以上それが如何なる言葉であつても、神樣の御心から出て來たのであるから、其の通りに行ふて行くのが道であります。

所が多くの人の中には神樣の御言葉に對して、それは左樣やがと思ふ心を出す人があるのであります。左樣云ふのは世の中の事情から考へたり學問の上から云ふのでありますが、若し左樣した心が出て來たならば、それに依つて心が二つに割れて來るのであります。時に依ればそれが三つにも四つにも五つにも割れる事があります。心の割れたのは丁度兩手を擴げて物を受けやうとするのと同じで、神樣の御守護を受ける事は出來ないのであります。だから理屈を云

つたり、けれどもと云ふ心を出した者は、殆んど總て御守護は得られぬものであります。

更らに此の理を進めて云へば、此のけれどもと云ふ心は天の理を彈き返へす事になるのであります。何故なら理を素直に受け入れたのならば、けれどもと云ふ心は出て來ない筈でありますが、受け入れたくないと云ふ心があるから、けれどもと云ふ言葉が出て來るのであります。故に是れは天の理を消しながら助けを得やうとして居るので、思ふ通り守護を受けられる譯が無いのであります。

嘗て私しが未だ青年の頃病氣になつて、知人から御話を聞かして貰ひました。處が其の人は私しの缺點ばかり指摘するのであります。それで話を聞きながら非常に腹を立てたのであります。所が腹を立てれば立てる程病氣が悪くなるので、考へました末斯う云ふ事に思ひ付きました。それは話はたとへ如何であらうとも、此の人の今日まで道の爲めに苦勞せられた理と、私しの爲めに話をして下さる眞實に對して、私しが悪るく思ふのは間違つて居た。話しではない

其の心の理を聞かして貰はねばならぬのだと氣が付いたのであります。其の事に氣が付いてから病氣も直ぐ御助を頂いた事があります。これは卽ち理を返へしていたのを懺悔して話を受け入れたからであります。

斯う云ふ譯でありますから、個人と云ふ上に付いて此の心の出るのが好くないのは無論で、團體の上に付いても同じ事が云はれるのであります。例へば教會の事情に付いて神樣の御話を聞かして頂いても、其の話の理に從はずに勝手の理を出したならば、それは一手一つの理を缺いてしまふ結果事情が治まらぬのであります。それ故神樣も皆が相談仕合ふて、皆よつて間違つたのならば神は許すとも仰せになつたのであります。所が人間から考へて如何に好い事であつても、此のけれどもと云ふ心が出たら一つにならんから神樣の御働きがなくなるのであります。

□

半分わかつて半分わからんと云ふのは、物事を徹底して居ないのを云ふのであります。例へて申しましたなら天理教が分つて、道が分らん樣な人を云ふのであります。卽ち天理教の成立や天理教の組織や天理教の現勢等に付いては、非常に詳しい事まで知つて居るが、眞實の道とは如何云ふものであるか、心の中で少しも分つて居ない樣な人が、卽ち半分わかつて居て半分わからん人と云ふのであります。

斯うした人はほんの外面的な事ばかりを見て居る人でありますが、更らに今少し道に近づいて居る人でも、やはり此の半分わかつて半分わからん人があるのであります。それは如何云ふ人かと申しますと、例へば教理に就いては非常に好く知つて居つて、因緣は如何したものとか、足納は斯うせねばならぬとか說明して居ながら、さて其の人の日常の行動には少しも因緣を悟

つて居る所もなく、足納をして居る所もないと云ふ樣な人であります。此の人達は教理が半分わかつて半分わからん人と云はれるのであります。

それなら道一筋で通つて居る人なら好かろうと思ふのでありますが、其の中にも半分わかつて半分わからん人々があるのであります。卽ち道の中途までは知つて居るが、それから先の道が少しも分らん人があります。是れもやはり半分わかつて半分わからん人であります。

先日私しが岡山へ參りました處、私しと教校を同期に卒業した人が、其の地方で布教して居るので呼んで會ひました、本人の云ふのには布教に出て三年目に四五十の信徒が出來たが、その以後は少しも增へないで、今だに四五十の信徒より無いと云ふ話でありました。それで私しは其の人に貴樣は此の道に年限の理と云ふのがあるのを知つて居るかと尋ねましたら、そんな事は少しも知らんと云ふのであります。それを知らずに道を通ろうと云ふのは無理ではないかと申しますと、それでも私しは始めて聞かして頂きますと云ふのであります。

是れは思ふに此の人許りでなく布教者の大多數が、此の人と同じ樣な通り方をして居るのであります。それは此の道は人を助ける道であるから、人の病氣さへ助けたら好いと云ふので、心の助けを思はないからであります。その爲めに病氣助けの理、即ち貸物の教理と懺悔と因緣のみを說いて居るのでありまして、道すがらの理を伴れて通る事を忘れて居るのであります。

是れを丁度物に例へたならば、種蒔きはせなければならんと聞かされたら、夏でも秋でも冬でも種蒔ばかりして居ると同じであります。又肥を置かねばならぬと聞かされると、又他の事は打ち捨てゝ置いて、一年中肥ばかり置いて居るのと同じであります。斯うした間違つた事をすれば、折角の種蒔も無駄になれば肥を置いても無駄になるのみならず、却つて木を枯らしてしまふ樣な事が出來るのであります。

ですから此の道では旬を見て。旬に合ふた働きをするのを大切にせられて居るのであります。其の旬を大きくして云へば年限の理で、小さくすれば刻限の理になるのであります。以前は御

本席に神懸があつて、刻限に依つて時旬の理を教へられ、其の理に從ふて道の人は通つて來られたのであります。そして此の道では此の刻限の理と云ふのは、大層重んぜられて居るのであります。

其の刻限の理に從ふて行けば榮えるが、其の理をはづせば、たとへ好い事をしても好い事にならないのであります。それは先方の用のある日に手傳ひに行かずに、暇になつてから手傳ひに行くのと同じで、邪魔になりこそすれ用には立たぬのであります。だから道を通るには此の時旬の理を見て働かねばなりませぬ。

所が今申した布教者の如きは、人を助けるだけの理は分つて居るが、道すがらを見て通る理が分らんから、遂ひには何にも分らん事になつて、今では行く先の道が通れん樣になつて居るのであります。お道の多くの布教者の中には、斯うした點で苦しんで居る人が澤山あるのであります

それは丁度道と云ふものは眞直な道ばかりでなく、右に折れて行かなければならぬ時もあり、

左に曲つて行かなければならぬ時もある事を思はずに、今まで眞直に歩るいて來たからと云ふので、家に突き當つて居ながら尙ほ前へ進もうとして居るのと同じであります。時に依つては道に添ふて折れ曲る事を知らぬから、我心から苦しんで居るのであります。是れが半分迄の道が分つて、半分の道が分らん所から、さつぱり分らんも同じ事になつて、通れる道が通るに通れん樣になつて居るのであります。故に道の事は分り切る所まで尋ねて、其の指圖に從つて行かねば、旬を誤り通れんやうになるのであります。

□

此の道は人間の相談から出來たのでもなければ、又人間の智慧から出來たのでもなく、天然自然の神の御心から出來て來たので、それが一つの理であります。其の一つの理を慕ふて此の

道の信徒は皆な附いて來たのでありますから、何處までも此の一つの理を我が心として、如何なる處も通つて行かなければならぬのであります。

そこで此の道を信ずる者が十萬百萬と出來ても、其の人等が皆な此の一つ理に添ふて通る樣になれば、喧嘩もなければ爭論もなく、よく治まつて行くのであるが、此の一つの理に添ふと云ふ道の心がない爲めに、物ごとが平らに治まつて行かないのであります。何にも云ふ事ないと云ふのは、卽ち此のよく治まつた事を云ふのであります。

所が人々の心と云ふ理が出て來るから、治まる處が治まらなくなるのであります。人々の心と云ふのは人間が自分の立場から物事を云ふのを云ふのでありまして、例へて云へば一家の內には主人もあり家內もあり下男もあり下女もあると云ふ樣に、種々異なつた仕事をして居る人があります。其人等が各自に自分の都合の好い樣にと思ふ心から、我儘を云ひ出したら僅かな人數の一家でも治まらないのであります、例へば自分は主人公であるから皆私しを敬ひ仕へねば

ならぬ筈だと云ひ、家内は自分が一家を整理して居るのであるから、自分を皆寄て大切にせなければならぬと云ひ、子供は自分は此家に後繼者であるから、自分は出來るだけ可愛がらねばならぬと云ひ、下女は我が御飯をたいて皆に食さして居るのであるから、自分を勝子に使はれてはならぬと云ふ樣に、自分の立場のみを主張する樣になつたら、一家の内でも治まらぬのであります

尙ほ是れを廣く一國の上に付いて見ても、斯うした事は澤山あるのであります。現に世界は今や非常な爭亂の間にあるが、是れは皆我が立場から物を云ふ者許り寄つて居るからであります、例へば勞働者は飽くまで勞働者の立場を立て樣と思つて居るし、資本家は資本家の地位を維持仕樣と考へて居るし、婦人は婦人で婦人の立場を明らかにし樣と勤めて居る。其の結果互ひに我儘の云へるだけ云つて居るのが、今日の世界の狀態で、人間は皆な不安な心で暮して居るのであります。

斯うした各自の立場から物を言ひ出すのが、人々の心と云ふ理であつて、是れがあつては如

何もならん、治まらぬと云はれたのであります。尙ほ此の事を神樣は我が身我が家から思案する理は、何よの事も受取る事出來んと仰せになつた事があります。即ち如何に之れが好い事であつても、其の事の土臺に我身や我が家を思ふ所から考へ出されたものならば、それは眞の誠でないから神樣は御受け取りにならぬのであります。人々の心と云ふのは多くの場合、此の我が身我が家から考へるのであつて、それが爲めに何事も互ひに意見が衝突して、事情の治まらぬのが澤山あるのでありますから、此の人々の心と云ふのは出さぬ樣にして、一つの理に添ふ道の心になつて通らねばならぬのであります。

□

づゝないと云ふのは大和地方の方言で、息苦しいとか堪えられんと云ふ場合に使ふ言葉であ

りますが、先づ苦しいと云へば意味は分るのであります。其の苦しいと云ふ時が節と云ふのであります。節と云ふのは竹の節の如く、堅い強い所であるから、人間も通り惡い所を、卽ち苦しい所を敎祖は節と例へられたのであります。

そこで人間が通る一生の長い間には、二度や三度は必らず苦しい時があるものであります。其の苦しいと云ふ事は主觀的の事でありますから、甲の人に苦しい事であつても、乙の人には苦しくない事もあり、乙の人には苦しくない事でも、甲の人には苦しい事もありますから、如何なる事柄が苦しい事であると、說明する譯には行きませんが、兎に角苦しい時があるのは事實であります。

それは丁度草木が、秋から冬にかけて葉が枯れて、其の成長が止まるやうに、人間も節に出合つたら、如何しても心通りにものが出來て來ないのであります。所が其の秋や冬を越す間に草木が養分を吸收する樣に、其の節の間に人間も大いに發展する力を養ふて置くのであります。

其の力で春になつて草木が新芽を吹いて行くやうに、人間も其の節から新らしい芽を吹かして行かねはならんのであります。

是れを實際の上から申しましたら、病氣に罹ると云ふ事は、身心を苦しめるのでありますから、如何なる人にも節であるに相違ありません。節に出合つたら、誰れしも悲觀するのが當然でありますが、若し其の時心を改めて懺悔をした爲めに、其の病氣が癒つた。同時に人間の病氣は心次第に依つて、神樣の御守護を受け助かるものであると云ふ事を悟つて、病氣全快後其の人が人助けの道を始めるとする。すれば病氣が節となつて、其の節から人助けの新芽が吹いて來たのであります。

然し玆で考へねばならぬ事は、節があつたら必らず新しい芽が吹くものと、決まつて居るものであるかと云ふ事であります。それは大抵の場合、早やいか晩いか芽は吹くものであります。又た節に出合つた切り、芽が吹かない場合があるのであります。それは節に出合つて其

の節の爲めに心が倒れて行つた時には、新芽は吹かないのであります。病氣で心の立て替へが出來ずに、出直して行くのは、全く心が倒れきつたからであります。

それでは如何したら、節から新しい芽を吹かす事が出來るのであるかと申しますと、それは節や樂しみやと喜ぶ心になるのであります。病氣になつても其の病氣を悲しまずに喜ぶ、其の喜ぶ心から、新しい芽が吹いて來るのであります。節が來たから芽が吹くと云ふて、心に喜ぶ理を持たなんだら、それは何時まで待つても、新芽が吹いて來る樣な事は無いのであります。

過日も或る教會の所長が、私しを尋ねて來て、自分は親の代から信仰して居るのであるが教會が如何も發達せないから、教會の榮える樣な理を敎へて呉れと尋ねて來ました。それで私しが色々尋ねて見ると、其の所長は教會の衰へて居るのを非常に悲しんで居る。是れは人間から見たらば、一寸好い心の樣に思はれるのでありますが、實は悲しむ其の心の爲めに、教會が衰へて居るのであります。それで私しは教會を榮えさすには、方法や手段では出來そふな筈が

ない、其の悲しむ心を喜びに變へたら、必らず教會が榮えて來ると云ふて歸したのであります。

苦しい時に喜ぶと云ふのは、無理の樣に思はれますが、それをせないと新しい芽が吹かないのであります。私しも或る時苦しいのが當り前だ、水の中へ這入つて冷たいのが本當だと思つたが爲めに、一生取り返しの付かない、大きな失敗をした事があるのであります。故にたとへ苦しくとも、其の苦しみを喜びに變へて行かなければ、其の節を無事に越して、新芽を吹かす事は出來ません。

すれば如何にすれば節を喜んで通る心になれるかと云ふに、自分でやつて見て喜べぬ場合には、教理を聞いて喜べる所までの心を定めねばならぬのであります。又喜べる所まで聞いて、始めて教理の價値があるのでありますから、分らぬ所は飽くまで押して、そして喜べたら其の心から、新芽が吹いて來るのであります。

人間には賢愚と云ふものがありまして、賢い人は役に立つが愚な者は役に立たんから捨てると云ふ事はありますが、神一條の此の道には賢愚の差別はないのであります。それは云ふ迄もなく賢い者はそれだけの徳を授けて貰ひ、愚な者は徳が少ないのに相違ありませんが、然し道の爲めに盡した理に於いては異ひはないのであります。そして何方かと云へば神様は愚な者即ち阿呆や馬鹿の方を、神様は御望になつて居るのであります。是れは馬鹿や阿呆は多くは心が正直であるが、賢い者は才能があるにまかせて悪い事をする事が多いからであります。それを神様は人間と云ふ者は四隅を知つて三隅が分らんと仰せになりました。是れは人間があまり要らぬ事を知り過ぎて居る爲めに、必要な事を却つて忘れて居るのを仰せられたのでありまして、

此の道は或る意味に於いて阿呆になる稽古をするのであるとも云へます。何故なら今の都會の人々の様に、心が激しく働いて居ては心が助からん。その人等から阿呆になつてこそ。人も助けらるれば我身も助かる事が出來るからであります。

だが阿呆であつても怜悧であつても、神様に盡す理には二つが無いのであります。是れを人に付いて考へても、賢い人から親切にせられたから嬉しい、阿呆に親切にせられたから腹が立つと云ふ譯のものではない。賢愚を問はず親切にせられたら嬉しい如く、神意も又盡した理は賢愚に依つて隔てをして受取られるものではありません。皆同じ様に受取つて下さる以上、其の理は消すに消されんものであります。

教祖が御在世中それも非常に困難な道を御通りになつて居る時に、或る親族の御方がお屋敷の前を通るのに横を向いて御通りになつた。それに引きかへ櫟本の御親族の方では非常に氣の毒に思はれて、物を持つて御出でになつたのであります、其の時の事を神様が明治卅年代にな

つて、其の家が御屋敷へ御引越しになる時、その時の嬉しさが忘れるには忘れられんと仰せになつて居ります。是れは要するに賢愚を離れた其の親切に感ぜられたのであります。

斯樣な譯であるから神樣に盡した理は消すに消されん、捨てるに捨てられんと仰せになつたのであります。所が枝先の敎會などになると、盡して貰ふた時の理を忘れてしもうて、年を寄つたとか今の世に合はんとか役に立たんとか云ふて、古い人を捨てる樣な事をしたり、又た年寄りは若い者は生意氣だとか勝手が多いとか云ふて、捨てたりするのが澤山あるのであります。是れは古い理を消すのであつて、故管長公は決して人を反古にして、世界へ出すのやないと仰せになつた事があります。無論理は消えぬが又人も消さん樣にして行かねばなりません。

□

假輪と云ふのは桶の輪を入れる時に、假りに輪を入れてゞめてから、本當の輪を入れるので其れを假輪と云ふ意味であります。神樣が始めて人間をお造り下されてから、此の御道をお立てになる迄、九億九萬九千九百九十九年を經過して居ますが、其の間は人間の成人に應じて、其の時々に樣々なものを以つてお仕込み下されたのであります。例へば人間の心が惡氣に流れるのを防ぐ爲めに、佛敎の敎を立てたり基督の敎を始めたりして御世話下されたので、其は丁度子供の小さい時には、道理を言ふて聞かしても聞分けが無いから、化物や鬼などの話をして子供に亂暴をさゝぬ樣に、意見するのと同じであります。所が今度は約束の年限が滿ち人間に道理を說いて聞かしても、聞分けが出來る迄に成人したので、人間の內造り卽ち眞實の敎を始める爲めに、神樣が天下られたのであります。ですから此の道が眞實の道であつて、此の本當の輪を入れる爲めに樣々な假輪を以つて、世を治め人を仕込んで來られたのであります。されば此の道は眞の道であつて、神樣は敎へ始めの敎へじまいの道であるからだめの敎へ、卽ち世

界最後の教へであると仰せられたのであります。

此の道が世界だめの教であるならば、それ以來新しい宗教の興つて居るのは、何故であるかと云ふ疑問が起るのでありますが、日本に於いて今起つて居る教へは、殆んど此の道の眞似をして居るのであります。昨年東京へ行つた時府の社寺掛は、近頃新しい宗教を造るが、殆んど天理教を燒直したものばかりであると云つて居たが、是れは本當の事だろうと思ひます。又神様もあつちもこつちにも僞の本部が出來ると仰せになつた事があるのであります。是れに依つても此の道が世界だめの教である事が分るのであります。

然らば現在の本教が神様の仰せになつた、だめの教の儘であるかと云へば、左様ではありません。是の教會組織も亦道の者を仕込む、神様の假輪なのであります。それは教祖が在世中親が子に賴む理はないと云ふので、決して布教の認可を求められなかつたのであります。吉田家から教職を得られたのや、金剛山の地福寺から說教僧が來のなどは、教祖がせられたのではなく其の弟

子の方々がせられたのである。所が明治廿年御歸幽の際、扉を開いて世界を六地に踏ならそうか、扉を閉めて世界を六地に踏みならそうかと御尋ねがあり、扉を開く事を願はれたので、教祖はそれは神の心にかのふた、なれど皆の思惑と異ふでと仰せになつて御歸幽になりました。

そこで教祖を失た人々が、教會設置を思ひ立たれて、神様に御願ひなつた所世界おふほふの理として御許し下されたのであります。故に現在の御道は世界三分に道七分と云ふ有様であります。是から考へても今の道は眞の神一條の理から云へば、人間仕込みの爲の假輪であります。此の假輪が取れて眞實の道のみになれば、それ世界だめの教の理が現れて來るのであります。

□

人間と云ものは障子一重隔つたら、もう其の向ふは分らぬものでありますが、神様は如何なる

事をも見拔き見透しで人間が心の內で使ふ僅かな事でも鏡に物の映る樣に分るのであります。故に人間自ら知ずに使ふてゐる心使ひでも暗闇の內で思ふた事でも、何一つ神樣の御承知ない事はないのであります。故は人間は如何なる時如何なる場合を問はず、神樣が自分のして居る事思ふて居る事を見て御居でになると云ふ心を、失はぬ樣にせなければならぬのであります。

其の例を一つ二つ申しますると、敎祖が或る時奈良の監獄へ御苦勞下されました。其の時大阪の或る先生が、御敎祖はさぞ監獄で御苦勞下されて居る事だろうと思ふに付け、何とかして御敎祖が無事に御暮し下さる樣にと云ふ心から、陰膳を据へて給仕をして居られたのであります。所が日がたつて御敎祖が、御地場へ御歸りになりましたので、其の先生は大阪から地場に歸り、敎祖に御挨拶に出られたのであります。すると敎祖は貴樣の御蔭でひもじいなかつたで、と仰せになつたので驚き入れたと云ふ事であります。是れなど敎祖の心に世界の事が、凡て映つて居たから分つたのであります。

又た京都から狂人が籠で來た事があります。其の時取次ぎの人がその由を敎祖に申し上げられたら、敎祖はそれは眞似や〳〵此所へ連て來いと仰せになつたので、其の狂人を敎祖の前へ連れて行くと、敎祖は神がかんじよして神が入れたのや、其の金は何程あつたやろと仰せになつた。狂人はそれい聞いて、何處ともなく逃げて行つたと云ふのであります。

後に其の事實を取調べましたら、狂人の父が死ぬとき弟に遣る金を、兄に渡して置いたのであります。所が兄が父の死後其の金が惜しくなつて、何とかして弟に金を遣らずに濟す方法は無らうかと考へた末、終ひに眞似狂人になつたのであります。其所で家內の者が心配して、大和の庄屋敷に生神樣が居られると云ふ事であるからと聞て、狂人をお地場へ連れて來たのであると云ふ事が分つたのであります。

敎祖が神がかんじよふして神が入たと仰せられたのは、身の內は神樣の借物であり、殊に十本の指は十柱の神樣の理を現はしてあると仰せになつて居のでありますから、狂人が金をかんじ

よふしたのはつまり神樣の借物を使ふてかんじよふしたのでありますし、又た何處かへ入て置いたのもやはり神樣の借物の身を以つて入れたのでありますから、やはり神樣がせられたのであります、それ故敎祖が其の時の有樣を手に取る樣に仰せられたのであります。

斯樣に神樣は見透しの方でありますから、如何なる時も其の理を恐れねばなりません、其の理を恐れなかつたら終いには我儘をする樣になり。知らぬ間に澤山の埃を積む樣になるのであります。

□

自然天然の理から出來て來のが天の與へであつて、自分から欲する者は慾の心から成したので、與へて通ると云のではありません。天の與へと云ふのは、人々の因緣に依つて多い少ないは

あつても、人には人として必らず天の與へがあるのでありますから、天然の理を樂しんで通れば好いのであります。

人間を此の世へ神樣が御出しになるのは、丁度子供を親が旅に出す樣なもので、子を旅に出の時に子が中途で難儀する樣な事をして旅へ出す親はなく、必らず子が歸る迄の路金を渡して出に相違ない。それと同じ樣に神樣は人間へ、一生通るだけの路金は渡してある。それならこそ生れるなり乳があり成長すれば乳が止まるのである。だから廣い世界を眺めて思案して見よ。今日食べられんと云ふて餓えて死ぬ者が何人あるか。たとへ水を飲んでも土を喰ても乞食をしても此の世は通つて行ける。それに引きかへ若し喰べられん樣になつたら、金が無なつたらと云ふ心配から、病氣になつて死で行く者がいくらあるかも分らんのであります。

故に天の與へに凭れて、丁度親に伴れられた子の樣な心持で居たら好のでありますが、難儀をせん樣と云ふ心から、心配したり財產を造つて苦しんで行のであります。例へば手輕にして歩

るけば十里行ける者でも、重い荷物を持つたら五里より行けぬ樣に、澤山の財産を持たら早く中途で死なねばならぬ。死なぬにしても其の重荷の爲めに苦しまねばならぬのであります。だから人間と云ふものは、苦しもまい難儀をしよまいと思ふて、却つて苦しい難儀になる樣に、自分から求めているやうなものであります。

故に何にも自分から欲せずに、天の與へを樂しんで居ねばならんのであります。所が自分に天の與へが少ないから、卽ち德が薄いのにも拘らず、德の多い人と同じ樣に思ふて、我意を張て我儘勝手な事をする人があります。神樣も惡と云ふ理は立かけたら立つと仰せられた如く、一時は榮えまするが、それは日が經ば必らず亡びるものであります。卽ち苦しめられ嫌がらされた、人の心の芽が吹いて來たら倒れるのであります。又左樣ならなくとも神樣が其の身から御引きになれば、最早や何とも出來ないのでありますから、何時迄も變らぬ天の理に添ふて、その天の理から成る與へを、樂しんで通る程安心な道はないのであります。

□

兄弟と云ふのは肉身ばかりの兄弟を云ふのではありません、神樣から云へば人間は皆神樣の子であり、人間からは神樣は親であります。從つて兄弟と云のは此の意味の兄弟でありますから、全くの他人も皆兄弟となるのであります。其所で其の兄弟が勇むと云のは、卽ち仲好く喜んで交ると云ことでありまして、其の喜ぶ所から勇む理が出るのであります。反對に仲惡るく悲しんだり不足を付けたりするといづむので、いづめばいづむ理が出るのであります。

其の理と云ふのは神樣と云ふことでありまして、是は神樣の御言葉に此の道と云ふは、一つの心の理をよせて神と云ふ、と仰せ下されたのに依ても明らかな事であります。其の一つの理が人間の勇む勇まぬ理によつて、勇んだりいづんだりして來るのであります。

尙ほ此の一つの理を詳しく云ば、凡そ世の中に一つと云ふ事程六ヶ敷い事はないのであります。私しが未だ學校へ行て居る頃、暑中休暇で本部へ歸つて或る晩詰所に居ると、或る先生が來られて、世界でもう一人とない學者が來ら、玆一つと云ふ理を話して聞かすのやと仰せになつた。其の言葉が私しの心に何時迄も忘れられずに殘つて居したが、後に哲學を學ぶ樣になつて、此の一つの理と云ものが、非常に六ヶ敷いものであると云ふ事が始めて分りました。學校を卒業して本部へ歸り、御指圖を研究致しました所、此の一つと云ふ理が澤山出て來るので、段々調べた結果、神樣の事であると云ふ事が分つて來たのであります。

一寸考へますると一つと云ふ事程分り易い事はないのであります。然し此の一つと云ふ事は分つて居ながら說明する事が出來ない。そして此の一つを積み重ねたら何千何億の數が出來、又此の一つを割たならば、又何千何億の數が出來るのであります。故に此の一つは數の單位でありますが、是は如何も說明が付き惡い。と云つて分らぬかと云へば誰れでも承知して居るので

あります所、がそれが分り惡いのであります。

神樣は算盤の玉を一つあげたら何と云ふかと仰せになつた。或る人は是れを一とも云ひ、或る人は十とも云ひ、或る人は百とも又は千とも萬とも云ます。卽ち其の人の見る所に依つて違つて來ので、要するにそれは位取りが違ふからであります、是れから考へますると神樣の御働きを、一つより見る事の出來ない人もあれば、又千にも萬にも見る人があります。是もつまり其の心の置き所の違ひから違つて來るのであります。そこで御道と云ふのは一つより見る事の出來ぬ者は十を見るよう、千より見ん者は萬を見るように、自分の心の位取りを進めて行かねばならんのであります。

所が此の位取りを進めて行には、珠を一つ一つ入れて行かねばならぬのであります。が珠を入れて行たならば、必らず九の數に達するのであります。此所までは誰れにでも出來のであります。

まして、神樣は十のものなら九つまで數へてある。其所で此の世を苦の世界と云のやと仰せに

なつて居ります。所が此の九つから後と一つ入たら十になつて、一桁上がつて元の一に歸るので、卽ちそれで位が一つあがるのであります、其所で其の一つの珠の入れ方、之れが卽ち敎祖の敎へ下された此の道になるのであります。

所が世界ではそれが分らんから、九が苦しいとて八七六と逆に歸るのであります。所が逆に行ても又九が現はれて來るのであります。故に前にも九があれば後にも九がある。其所で心一つで其の苦を逃れて行のでありまして、又それが助かる道なのであります。

是れは要するに悟りの事でありますが、一家の內に於いても兄弟仲好く、子供が樂しんで居るのを見れば親が安心するし、子供が喧嘩して泣いて居ば親の心は苦しむのであります。人間と神樣も又之と同じことで、人々が仲好く遊んで居れば神樣も御勇み下さるのであるから、互ひに勇んで又一つの理を勇まさねばならぬのであります。

□

蕾の付いた枝を折て花瓶に差して置いたら、暫らくの間は水氣に依つて生きて居るから花も咲けれども、日が經つに從つて枯れて行くのは根がないからであります。人間も其の通りで根の無い者は、如何に奇麗に通つても何時か枯るものであります。すれば人間の根は何んであるかと申しますと心であります、卽ち心が確かでないと何事も榮えぬのであります。道の上から云へば、敎祖五十年の道が此根であります、所が多くの人は其の根から離れる樣な事ばかりするのであります。では如何してそれを切るかと云ふと、不足の心を使ふからであります。神樣も不足は切る理滿足はつなぐ理と仰せになりました。卽ち物を不足にし神樣も不足にするから、我が身我が家が榮えずに日と共に衰へるのであります。そこで又た此の世の根は神樣であ

りますから、何んでも神様に心をしつかり結び付けて置かなければならぬのであります。

年々美くしい花を咲さうと思ふたら、根にしつかり肥を置かねばならぬが、肥は花や枝に振まくべきものでなく、それとは直接の關係のない、根に置くのが枝葉にきいて來のであります。故に人間もする事やなす事にのみ心を奪はれずに、其の根である心に肥を置ねばならぬのであります。そして心の根をしつかりして置ば、風にも雨にも安心して通れるのであります。それ故神様も正根のない者に、なんほ說て聞かしても役に立たんと仰せになつたことがあります。又た道の上から申しましたら、信徒なり敎會を盛んにするには、其の根である神様に肥を置ねばならぬのであります。卽ち元に盡す理元を立る理が、我が身の榮える理立つて行く理であります。所が多くの人はそれを反對に、榮えたら元へ盡さうと云ふ心になるから、是が大變な間違ひになつて來るのであります。

右の様な譯でありますから、滿足をして根を繫いで行ねばならんのでありますが、蕾の花の譬

へは神様が明治卅一年六月。青年會に下された御言葉なのであります。其の點から考へまするト、青年と云ものは先ばかり考へて居て、其の足下に氣がつかないものであります。それ故其の足下である根に心を附いてる様に、斯うした御言葉を下されたのであります。

尙ついでゝありますから申して置きますが、其の時神様は中々容易で出來んけれども、出來たら大きい力になると云ふので、少々ではかためる事出來ん、實際かたまれば、一人萬人の力と云と仰せられたのであります。是れから考へると青年會が二十年あまりの間成立せずに來のは、神様の思召しであつたと云はねばならんのであります。けれども青年會を作らねばならぬと云ふ事は、必要な事であると云ので、臺と云ふ臺なしに働いては如何もならんと仰せになり、其臺は心である事を明らかにして心はなるだけ下から行つて人の事してやると云ふが臺と仰せになつたのであります。是れは要するに心を造れと云ふ事なのであります。

心さへ出來たら神様が自由に使ふて下さるので、御言葉にも使ふて見て使ひ勝手のよいもの

は何時までも使ふが、使ふて見て使い悪いものは一度限りやと仰せになつた事もあります。だから心を造り根を確かにして、神樣に使ふて頂かねばならぬのであります。

□

人間と云ふものは何か希望を以つて暮して居るものであります。其の希望が人に依つては金錢である事もあれば地位である事もある樣に、それ〳〵異ふが、兎に角希望を持て暮して居るのであります。又その希望があればこそ、苦しい中でも辛い所でも辛棒して暮して居のであります。所が一心に働いて幸ひに其の希望が滿されたら如何なるか、其の時多くの人は滿足の悲哀と云ふのを感ずるのであります。

例へば春になれば木に花が咲くが、花の咲く迄は左樣に其の木を見も淋しいとは感じなかつ

たのが花が咲て後暫らくして散つてしまふと、殊に深い淋しさを感じるものであります。それを世界では晩春の淋しさと云ふのでありますが、人間もやはり其の通りで、ものが成功すると其後から此の淋しさが隨いて來るのであります。此の時多くの人は其の心を倒してしまつて、其爲めに苦しみに出合ふたり病氣になつたりするのであります。

此の點から考へますると、人間が何か希望を持て暮す事は其の時は好い事でありますが、一生から考へると決して好とは云はれません。そこで御道では如何するかと申しますると、物や形に付いて目的を定める事は無のであります。それでは何を目的とするかと申しますると、誠の心で此の世を通るその事を目的とするのであります。即ち誠の心で通つた結果が如何ならうとそれは問ふ所ではないのであります。故に目的は内にあつて外に無いのであります。

所が多くの信徒の中では教會を設置したり、信徒の出來るのを以て、お道の目的の如く考へて居る人がある樣でありますが、是は其の手段と目的とを間違へて居るのであります。故に教會

を設置する迄は、隨分苦しい日も厭はずに通まするが、教會が出來るともう心が安心して倒れてしまふのであります。その結果教會になつてから、少しも發展せずに居のが澤山あります。是れは卽ち眞の御道の目的とすべきものを誤つたからであります。

由來お道では決して其の結果に付いて判斷するのではありません。玆に假りに大きな教會を建築した人と、心の埃を一つ拂ふた人とあるとする、世界の多數の人は其の眼に見た點のみを見て、建築した人を豪い樣に思ふのでありますが、神樣が是を見れると反對になるのであります。何故なら大きい建物を建るのはそれは、苦勞であるには相違ありませんが、然しそれは僅かの年限で濟む事であります。然し我が好きな心を一つ取と云ふ事は、其の人の一生に渡つての仕事でありまして、朝から晩まで常に心付て居なければならぬ事であります。故に理の上から考へたら、此の方が更に多くの苦勞を持つて居るのであります。從つて神樣が判斷をなさる場合にも、彼れよりも是を重んぜられるのは當然であると云はねばなりません。

斯樣云ふ譯でありますからお、道では成べく其の結果を見ない樣にするのであります。是れを小さい事に付て申しましても、神樣は自分でした事は我が口で人に云ふなと仰せられるのであります、卽ち自分が人の爲めになる陰德を積だ時は、決して人に云てはならぬ、それは折角好き事をした心の喜びが消えてしまふからであります。好き事をしてそれを心の內に治めて置けば、何時迄も喜びが續くのであります。それに引き換へ惡い事をした時には、早く人に云てしまはねばなりません。何故なら惡い事をして心に持て居れば、日が經つに從つて苦しみが增して行き、人に話せば其苦しみを少くするからであります。卽ち好き種は自分の口からほじくり出さん樣にし、惡い種は早く心から放り出てしまふ樣にするのであります。

斯樣に好い事は心に治めて置ば、何時迄も樂しみがあるのでありますから、其の結果を見る事は何事に依らず樂しみを失ふのであります。是れを御敎祖の生涯に付て見ましても、神樣も仰せになつた如く、五十年の長い間今日はやれ〳〵と云なしにお果てなされた。苦勞の仕損と云

ふのは教祖の事やと仰せられた通りであります。其の御教祖は眞實の心で御通りになりましたが其の結果は殆んど見て居られないのであります。今日の我々こそ其の結果を見せて頂いて居るのであります。斯樣に教祖は眞の心で通られたが、其の結果に付ては何にも見て居られん所に、くめども盡ない深い理があるのであります。ですから教祖の道を通る者は、此の教祖の御心を心として、眞の心で此の世を通る事を目的とし、其の結果が如何なるや否やは問べきではありません。それを神樣は長い間の樂しみの理を結んでしまふたら、それで樂しみの理は消えると仰せられたのであります。

□

一石の酒でも酒なら、笹の葉に置た露ほどの酒でも酒に異ひがないのは、卽ち理が一つである

からであります。量の多少を云ふのは世界並であつて、お道は其の理を云のであります、ですから人の金を一文盜んだのと一萬圓盜んだのと、表面から見ば非常に違ふ樣でありますが、盜む者の心の内に這入つて考へたら、左樣大した變りはないのであります。其所で神樣は何事に付ても其の心の上から判斷せられるが、人間は其の表面より分らぬから表面の事のみに依て判斷するので、其所にお道と世界の大きい違ひが生じるのであります。

例へば先日の新聞の記事に、女學生が卒業式の歸りに人に殺された事が出て居ましたが、普通の考へから申しまると、人を殺すと云のは大惡であるから斯う云ふ惡い者は、神樣が身動きの出來ない樣にして下されたら宜からうにと思ふのであります。然し道の上から考へまするとした人殺しは罪は未だ輕いのであります。世界にはもつと慘酷な殺し方が澤山あるのであります。

それは表面奇麗な言葉を使ひ親切らしうしながら、其の心では白刃を抜て切り合ひをして、人

をなぶり殺しにして居る者が澤山あります。例へば嫁と姑との間に於て、或は親子の間に於いて、斯うした事は日々澤山行はれて居のであります。今日若い人で病んで居る人や苦しんで居る人は、大方此の殺し合の結果であります。其の遣り方が家内で巧妙でありますから、人は其の表面の事實のみを見て、病氣で死だと濟まして居ますが、心の内へ這入ると斯う云ふ事が隱されて居るのであります。所が神樣は心の内を見透しでありますから、彼よりも此の方を重しとして之れを罰せられるのであります。それを知んから世界の人は、時々神佛も無いかと云ふて怨み言を云ふのでありますが、此は心の理が分らぬからであります。

神樣は今申しました通り何事も心から押て判斷なさるのでありますから、世界の上からは一寸會點の出來ぬ所もあるのであります。然し深く考へて見ら、眼に見える事の大小は必ずしも、心の大小に相應して居ものではありません。時に心では小さい事が表で大きい事になり心で大きい事は表で小さい事になつて居ます。それで神樣は小さい事が大きい大きい事は小さいと仰

せられた事もあります。

斯う云ふ譯でありますから、神樣を對象として信仰して行く以上は、方法や體裁などは一切心に持たず自分の心を深く考へて、理を明らかにして行かなければ、つひ人間と云ふものは物事や事柄に心を取られて、神樣から逆まな理を見せられねばならぬ樣になるのであります。所が理が分つて居れば結果の多少や量の多少に依つて、理を間違へる樣な事がありませんから、危い所も無事に通り抜ける事が出來るのであります。其所で神樣は其の理を明らかに分る樣、卽ち心の上に於いては表の大小に抱らぬものであるのを示すために、御酒と云ふ例をもつて御酒と云ふは笹の葉にしめしただけの御酒でも、やはりお酒と云ふだらうと仰せになつたのであります。

是を更らに云へば酒を呑んでは惡いと云へば、一升であらうが盃に一杯であらうが、惡いに二つは無いのであります。けれども澤山呑む呑まんで罪の大小を計らうとするのでありますが、神樣は呑む心を惡いとせられるのであります。手で人を叩いても叩く手が惡

いのではなく、叩く心が惡いのでありますから、此の點を間違へぬ樣にせなければなりません。

□

以前御本廟樣の仰せられる事を、無理の樣に人が取違へをしましたので、人を困らす樣な心では神が入込むかと仰せられたことがあります。と云ふのは人間には勝手な心や氣儘な心があるから、神樣の仰せになる事を卒直に受け入れる事が出來ない、それで知らず〳〵神樣が無理を仰せられる樣に思ふのでありますが、神樣は助一條の御心であらせられるので、其の神樣が人の困らすやうな者の心は御入込になる筈もなく、又た無理を仰せられる筈もないのであります。例へ一言半句と雖も、皆人を助けたい心からでありますから、靜かに考へたらそれが分つて來のであります。

然し神樣の仰せられる事は、成程人を助ける爲であると分るのは後の事であつて、其の時其の局に當る者に取つては、確かに無理である困ると思はれる點が澤山あるのであります。例へば本部の或方の御屋敷を定められる時に神樣に伺はれたら、何處と指定なさらずに考へてみよとか、空た所とか仰せられて、最後に現在の所を定めて伺ふと、分つたかと仰られただけであります。是などは一寸考へたら神樣が無理を云ふて居られる樣でありますが、さて今から考へて見ますと、考へさせて苦心さゝれる所に理が添ふのでありまして、始めから分つて居ばその理が無いので、神樣は苦しめて理を作らされたのであります。

是から考へましたら、苦心なしに教理を聞いたのは理が少ないので、苦しんで聞いたのは苦しんだだけ理があるのであります。教祖在世時代には刻限の話があると云へば、夜中でも飛び出して襖一重隔てゝ、眞暗の中で聞して頂き、歸つてから皆集まつて其話を研究して、夜を明されたさうであります。從つて昔の方々の御話は苦しんでお聞きになつただけ、重い理が添ふて居るの

であります。今の人は樂して教理を聞、それを又樂に取次ぐから理が働かぬのであります。是れを云換れば早合點するから、話が分つて理が分らぬのであります。或る先生が若い時教理を覺へて、道の話は借物と八埃と因緣だと思つて居れた。所が或時病氣になられて神樣に伺はれると、道は分つてゐると思ふやろ、なれど盡し三年運び三年理の三年、あら〳〵十年通らにや分らんと仰せになつた事があります。是れから見ても眞の道の理は容易で分らぬのであります。卽ち苦しんだだけの理より分らぬものであります。そこで神樣は人間可愛い心から悟らすやうにして下さるのでありますが、人間はそれを苦しみと取るのであります。

尙ほ是を別の事で申しますると、峠を越うと登つて行つた所が、八分所まで行つたが疲れ切つて道で倒れたとする。此の時助けて貰ふ道は二つより無い。一つは元來た坂を降りて行くのと、一つは今一と苦しみをして峠を越て向ふの宿へ着く事であります。此の場合何處かと云へば元來た方へ引き返す方が樂である。けれども又其峠を越さねばならぬ、所が今一と息苦しん

で峠を越て置けば、其の時は苦しみであるが後が樂であります。斯う云ふ時に後へ引き返へすのは眞の助けではなく、今一と息力をつけて峠を越さして助けるのが眞の助けであります、此の時今一と息の辛棒をさすのは、さゝれる人に取つては非常な苦しみでありますけれども、却つてそれが助ける理になるのであります。

尙ほ此の例を實際に附て申しましたら、布敎者が單獨で知らぬ土地へ布敎に行くとします。所がお助けが上らず苦しんだ結果病氣になると致します。若し其の時其の苦勞に同情して、敎會へでも連れて歸れば一時は助かるけれども、又他で何か苦しみに出合ねばなりません。所が反對に今一段の苦勞をする決心をさして、其の儘助けたならば、布敎も成功して眞から助かる道が見出せるのであります。故に斯うした苦勞をさすのは、一見非常に慘酷の樣に見えますけれども、却つてそれが眞の助けになるのであります。

故に私の未だ子供の時に、本部の門前には澤山の乞食が居りましたが、敎祖は乞食には物を

やつて呉なと仰せられたと聞かして貰ふて居ました。是は物を與へて助けるのは、本人の心を却つて墮落さすからであります。お道に於てあまり慈善と云ふ事を尊びませんのは、此の理由に依るのであります。是れは一昨年東京の水害に行つた時の事でありますが、罹災民が人から物を慈まれるのに馴れて、却つて其の心が墮落して居るのを見受けましたが、是等も丁度乞食と同じやうな心になつて行きつゝあるのであります。

斯う云ふ理由でありますから、お道では其の心を助けるのを主として、形の上の助けには重きを置かないのであります。從つて安價な同情などは却つて人の、心を墮落せしむるものとして排斥するのであります。又實際の上から申しまして、お助けの時など病人の樣子に同情したら、その爲めに心を奪はれて、眞の助けが出來ないのであります。自分神の代理者であつて、神樣は心を直す爲めに病氣でせめて居られるのであるから、自分は言葉を以つて心の改まるやう、攻め切る心になつたら、神樣は必ず御助け下さるのであります。

私し自身の經驗から申しましても、自分が非常に苦しんで居る時、同情して呉た人は私しの心を倒してしまひましたが、父が私しの苦勞を未だ苦勞の始めだと云ふて呉れましたので、心が立て直つた事があります。故に同情は人を殺すもので、却つて慘酷のやうに思はれる事が助けるのであります。是れを御神樂歌では、むごい言葉を出したるも早く助けを急ぐから、と仰せられてあるのであります。

右の樣な理由でありますから、人を助けると云ふ事は、人を苦しめる事になるのであります。斯う云ふと矛盾して居る樣に思はれますが、苦しむ理が助かる理でありますから、苦しみを背負ふ心にならなければ助からぬのであります。そこで人に苦しみを與へて平氣で居やうと思へば、人の苦しみ以上の苦しみを自分がして居なければ、人の苦しみを平氣で見て通る事は出來ないのであります。して見れば何處まで人の苦しみを見て居られるかに依つて、何處まで助けられるかと云ふ事が定まつて來るのであります。

又眞實人を助けたいとか眞に道の御奉公をしたいと云ふ心があつたら必らず、苦しんで通らなければならぬのであります。道の人で病氣もなし家も都合よく行く心配もない、お道は結構だと云ふて居る人があれば、その人は必らず不熱心な人であるに相違ありません。何故なら熱心に眞の心になつて行けば、必らず苦勞が出るのが當然であるからであります。例へば土持ちをしても不熱心な人は疲勞せぬが、熱心な人は疲勞する程度が多いやうなものであります。

故に道に於いても熱心な人程苦勞するのであります。斯う云ふと助かる道で苦勞するとは分らぬと思ふ方があるかも知れませんが、是れは家の内で間に合ふ子僧は多く使ふが、間に合はぬ者は捨てゝ置くやうなもので、神樣の心に適ふた者は、多くの用をして苦しんで行ねばならぬやうなものであります。然し見える所では苦しんで居るが、一度神樣のお心になつて考へたら、苦しんで居る者は其の心の内で光つて居りますが、樂して居る者は其の光が無のであります。故に道の者は困る樣な事が出來ても、それを不足に思はず不幸が却つて幸福になるのだと

思ふて通らねばならぬのであります。

□

凡そ何事に依ず事情が生じると云ふのは、始めは僅かな小ない事が、あちらへ引つかゝりこちらへ引つかゝりして出來て來るのであります。例へば電車の中で足を踏れたのが動機で、互ひに言爭つた結果、血を見る樣な騒になるやうなものであります。故に其の始めは極く簡單な事が、後には大きくなるのでありまして、却つて大きい事は何んでもなく治まるものであります。

然し斯く事情が生じたのは、丁度糸がもつれたのと同じでありますから、其の事情を治めるには第一に其の糸口を見出して、それからほぐしてかゝらねばならんものであります。その糸口が第一の事情と仰せられたのでありまして、糸口を見出さずしてそれを解こうとしたとて無

駄であります、其所で其の糸口と云ふのは何んであるかと申しましたら、人間個人の上に付いて申したら、人間の心が其の糸口になるのであります。

何故なら凡そ如何なる事でも、人間の爲す所のものは凡て人間の心から生じて來ものであります。故に其の心から治めて行たら、如何なる事情でも解決が付くべき筈であります。例へば兄弟が財産上の爭ひをして居る時に、其の財産の分け方を以て治め樣としては、中々容易では治まりませんが、お道の理を聞し借物と云ふ事を悟らし、互ひに人間が眞實を以つて通らねばならぬ事を會得せしめたら、其の問題は何でもなく解決するのであります。故にお道は其の心から治めて行のでありますが、世界は是に反して、事柄から治めやうとするから治まらぬのであります。

心から治めて事柄に及ぼすと云のは、根から枝葉に及ぼすのであつて、是なら如何なる事情でも治まるのであります。是に反して事情から事柄を治めるのは、丁度女の髪の毛を先から根

にとこうとするのと同じで、解けそうな筈がないのであります。解けば解く程もつれて來のであります。解けば解く程もつれて來のであります。反對に根から解けば見事に解けるのであります。故にお道では如何なる場合にも、例へば病氣の樣な時でも、其の根である心から癒して行くのでありまして、世界では病氣そのものから癒そうとする、其所に違ひがあるのであります。

以上は主として人間個人としての上から申したのでありますが、是も一軒の家に付いて考へると、一軒の主人の心が其の根となるのであります。一軒の主人の心が治まらなかつたら、其の一軒は治りそうな筈がなく、又た主人の心が治まつたら、其の家は治まつて來るのであります。そして一家の人々が始めて滿足する事が出來るのであります。

更に是を一つの教會の上から申しましたら、教會に事情の出來て來るのは、要するに會長の心が定まつて居ないからであります。即ち會長の心の理が人々に映つて事情を起して來るのでありますから、其の事情が圓滿に治まるやうにするには、其の會長の心から治めて行か

なければならぬのであります、然るに其の會長の心を捨て置いて、其の事情のみを治め樣と
するから、丁度人の影を追ふて居る樣なもので、日が照らなかつたら無い樣に見えても、又日
が照つたら影が現はれる樣に、何時迄たつても治まらぬのであります。故に會長の心が糸口
であるから其の糸口からほごさなければ、十分人々に滿足さす治めが出來ないのであります。

□

人間が如何に立派な花の咲く種を持て居ても、それを地上にも蒔かず持ち續けて居ただけで
は、何の價値も無樣に、如何に立派な心があつても、それが世上へ理を現はさなかつたら何にも
ならぬのであります。例へば佛敎の僧侶の樣に山に入つて修業をし心を澄しても、里に出ずに
一生山の中で死んでしもふたら、折角積んだ修業が何の甲斐もない事になるのであります。そ

れ故御敎祖は此の道は山の仙人を造らずに、里の仙人を作るのやと仰せになつた。里の仙人とは
人々と互に暮す其の中で、山で修業した仙人と同じだけの精神を持つ樣になる事を仰せられた
ので、是でこそ修業の價値があるのであります。若し世上に理を現はさなかつたら、澤山の金錢
を持て居も、それを使はないのと同じで、使はなければ金錢は石や瓦も同じであります。其所
で眞に價値のあるものなら、其の價値を世上に現はして行なければならんのであります。

そこで我々は此の結構なお道を信仰さして貰ふて、容易に聞れぬ神樣の敎を聞して頂き、眞
實の心を養ふて居るのでありますから、其の心の理を世上に現はして行ねばなりません。御神
樂歌にも、とても信心するならば一つの講を見にやならんとあります。講と云のは昔しお道で
人々の集るのを講を結ぶと云ふたのでありまして、今日で云へば敎會であります。故に信仰を
するからには一つの敎會を、神樣から頂くだけの信仰をせなければならんのであります。其所
まで信仰を續けて行かなければ、折角御道を信仰さして貰ひ、日々眞の心を使つた甲斐がない

のであります。

然し茲で考へねばならぬ事は、世上に理を現はすにしても、現はしてはならず現はれて來のを待ねばならぬ事であります。現はした理と現はれた理とは、一見同じ樣でありますが實は非常な相違があるのであります。例ば同じ櫻の花にしても、造花の花ならば今日一日にも出來が、自然に生る櫻の木に咲く花は、春の來るまで待たねばならんのであります。所が造化の花には生命が無が、自然に咲く花には生命が宿つて居るのであります。それと同じで人間の力で現はした理は同じ樣であつても、其所には道としての生命が在ませんから、發展がせないのであります。

だから現はした理は生涯それに依て苦しんで行かねばなりませんが、現はれた理はそれに依つて生涯樂しんで行けるのであります。現在の教會に付て是れを見しても、教會が次第に榮え て樂しんで通つて居る人もあれば、無理に人間心で教會を造つて苦しんで居る人もあります。

無理に造つたのは理から出來て來のではありませんから、人の顏色を見たり氣兼ねや遠慮をして行ねばならぬだけ苦しいのでありまして、理から成り立たのならば、捨てゝ置いても人が慕ふて來から、心が助かつて行くのでります。

然し理が現はれて來る迄眞の心を失はずに待て居ると云ふ事は、中々容易な事ではありません。それ故人間は近道して却つて遠い道を通るのでありますが、教祖は此の理の現はれて來のを待て居られたのであります。普通御教祖の御布教は五十年の御苦勞と申すのでありますが、教祖が布教せられたのは後の廿五年間で、それ以前の廿五年間は暗がりの道と云て、教祖が人の來るのを待つて居られたのであります。御教祖の御言葉に大木なら遠い所からでも見えるやろと云のがありますが、是れは教祖が大木であつたから外へ出て布教なさらなくとも、人が自然にそれを見て集まつて來たのであります。

私しは御教祖が布教に出ずに、人の來のを待つて居れたと云ふ所に、世界第一の人格者であ

る事を信ずるものであります。何故なら釋迦にしても孔子にしても基督にしても、皆な布教に歩いて居のであります。布教に歩るくと云ふのは悪い事ではありませんが、人の集まつて來るのを待つ信念に較べたら非常な異ひがあるのであります。是を普通の上から申しましても、頼みに行くのと頼みに來るのを待つて居のとは、其の間に力の差異がある筈であります。

故に眞實の道は頼み歩くのではなく、人々が其の眞實の理を慕ふて來る迄、待て居なければならぬのであります。然し現はれると云ふても其の人の因縁に依て、早やく理の現はれの人もあれば遲く現はれる人もありますが、兎に角理は生て來ものでありますから、其の春の來る迄待ねばなりません。それを待ち得ずに自分から現はそうとしたら、それこそ自分が苦しむ種となるのでありますから、天の理から出來て來るのが與へだと云ふ事を、深く思ふて行かねばなりません。

□

白い色を白く見、赤い色を赤く見、黑い色を黑く見るのは、是れは當然の事であつて、お道の者でも、色は其の色の樣に見えるに相違ないのであります。然し白い色を白く見る樣では、未だ御道が分つたとは云へないのであります。何故なら、白いものを白いと見る事には間違ひはなくとも、その白く見る事に依つて、間違ひが生じるからであります。尙ほ是れを人間の上に付いて申しましたら、人の悪い所を悪るく見ると云ふ事はお道ではなく、人の悪い所を好い樣に見て通るのが御道であります。又人の曲んだ事を正しう見て行くのが、人を助けるのでありますから、白いを白いと云ふ樣に、悪るいを悪るいと云ふて居いては、道にはならんのであります。

斯う云ひますと、お道は道理では分らぬ譯の分らぬ道と思はれますが、全く道理以外の道で

あります。それならこそ、理外の理と云ふのでありまして、人間の智慧や力で分るくらいなら此の道は必要がないのであります。尙ほ此の事を詳しく申しますと、斯う云ふ事になるのであります。

例へば今私しが困つて、人に無理な事を賴むとする、所が其の人が其の無理を引き受けて呉れるとする。然るに日が經つて今度は其の人が困つて、私しに無理を賴みに來るとする。其の時私しがそれは無理だから、賴まれぬと云ふ事は出來ないのであります。此所に道理以外の關係が生じるのであります。

此の關係を移して、人間と神樣との關係としたならば、人間は醫者でも藥でもかなわぬ所、即ち無理な事を、神樣に賴んで助けて頂こうとするのでありますから、其の無理を通すには、神樣の無理を通して行かなければならぬのであります。神樣は教祖でためして仰せられるのでありますから無理はないのでありますが、人間から見れば無理になる。其の無理を通して行か

なければなりません。其所で何處まで神樣の無理が聞かれるかに依つて、自分の無理を通せるかを決定して居るのであります。

斯う無理と云ふと語弊がありますから、是れを御道の言葉で云へば、勤めと云ふ事であります。勤めと云ふのは商賣家へ奉公するのと同じで、自分の心で我身や我身を使ふてはならんのであります。又主人の云ふ事なら、自分で理解出來やうが出來まいが、云ひ付け通りに働かねばなりません。好く働けば働くだけ、無理な使ひ方をせられねばなりませんが、そのかはり勤め上げたら、今度は主人が其の奉公人の云ふ通りになつて呉れるのであります。是れと同じで道でも勤め上げたら、神樣が云ふ通りになつて下さるのであります。其所で此の勤めと云ふ事が助けの臺になるので、御神樂にはようこそ勤めに付いて來た、これが助けの元だてやと仰せになつて居ます。故に勤め一條の道を踏まずして、人を助けると云ふのは、それは出來ない事であります。

又理は元にあると仰せられた通り、元へ盡し運ぶから理が身に添ふのであります。故に單獨で布教するのも結構でありますが、それよりも前に神樣の無理を通す、勤め一條の道を通らねばなりません、其所に卽ち道があるので、白を白と云ふて居られん所があるのであります。其所で白い色を白いと云て居る樣では、未だ世界の事だと仰せられたのであります。

□

成程と云ふのは分らぬ事が、會得出來た時に云ふのでありまして、心に疑問があつては成程の理は出ないのであります。學問は此の疑問の心を持つて進んで行くのでありますが、信仰は其の疑問の心を取り去るのであります。そして此の成程の理を心に治めて行くので、此の理が治まつた時、成程の人、成程の者と云はれるのであります。

尙ほ是れを具體的に云へば、病氣に罹つた時、何故自分は斯う云ふ病氣に罹るのだらうと思ふて居る間が、心に疑問を持つて居るので、醫學は此の心が働いて、肉體を解剖したり、其の原因を探求して行くのであります。所が他の方法、卽ち自分の心の間違ひを發見して、病源を見出して行き、其の病因が分つた時、成程と云ふ理が出て來るのであります。

故に成程と云ふのは一口に云へば、悟を開いた時の心の有樣とも云へるのであります。卽ち成程の理を外から云へば、悟つたと云ふ事になるので、其の悟りに幾重の理もある樣に、成程と心に治まる所も、種々に區別があるのであります。それは八埃の理が成程と分る時もあれば、借物の理が成程と治まる時もあるやうなものであります。

其所で其の成程の理が八方と云ふのは、八方に擴がると云ふ事なのであります。卽ち一人の心に成る程と云ふ理が治まつたら、其の理が多くの人の心に、影響を及ぼして行く事を意味するのであります。それは丁度靜かな池の中へ石を投げ込んだのと同じで、波紋が圓く描いて擴

がつて行くやうに、人の心に働いて行くのであります。尚ほ今一つ例をあげたら、無線電信の電波のやうなもので、やはり圓を描いて電波が擴がつて行く樣なものであります。然し此の場合無線電信を受ける裝置がして無かつたら、其の電波が感ぜぬ樣に、成程の理が八方に擴がつて行つても、關係の無い人々は感ぜぬのであります。一番多く感ずるのは、親子や兄弟や夫婦と云ふやうな、特別に關係の深い者が感ずるのであります。

尚ほ是れを私しの實驗に附いて申しましたら、或る時上州から子供病氣で、お地場へ參詣に來た人がある。所が國を立つと共に足痛になつて、お地場へ來たら足が動かなくなつた。三日目に私しが御話をして居ると、深く心に會得が行つた事があつた。すると同時に足が癒つたから、其の由を手紙で通知すると、同時刻に國で子供の病氣が助かつたと云ふ手紙が來たのであります。是れなども成程の理が働いたのであります。

是の理から考へまするとゝ人を助けると云ふ事は、自分が助かる事になるのであります。卽

ち自分が成程と悟つただけより、人を助ける事は出來ないのでありますから、必らずしも布敎に出る許りが、人を助けると云ふのではありません。學校に居ても其の心が進んでいたら、それだけ人を助けて居る事になるのであります。反對に惡るい事をして居れば、知らず〳〵の間に親兄弟を苦しめて居る事になるのであります。故に何處に居ても布敎する事が出來るのであります。

尚ほ此の事を今少し說明すれば、人間と云ふものは自分の仕て居る事は、俄に止める事が出來ぬものであります。酒呑は酒は百藥の長とか理屈を附け、菓子好きは甘い物を喰べたとて胃が惡るくなる道理がないとか、神樣の仰せられる勝手の理に、理をこしらへて居るのであります。それと同じで心に高い所のある人は、人の高い所を低うする事が出來ない。慾のある人は、人の慾心を取る事が出來ない。すればそれだけ自分の助ける領分が縮少されて居るのであつて、若し八埃が凡て心にあれば、人を助ける事は出來なくなる道理であります。故に自分の病氣が

無くとも、多くの人を助ける爲めに、一切の埃を自分が拂ふだけの心を以つていなければ、眞の御助けは出來ないのがあります。其所に布教者の眞の心の苦勞があるのでありますが、此の苦勞を通らねば自由用の働きは現はれて來なゐのであります。今の布教者が病人を探して神樣に御願ひすれば、それで濟むと思ふのは大きな考へ違ひであります。

一つの道

人間の言葉と云ふものは、必らずしも眞實のみを語るものではありません。時には事實とは反對の事をも、平氣で語つて居るのであります。然し是れは決して惡る氣があつて僞りを云て居るのではなく、實際の感じを云ひ現す事が六ケ敷いからであります。

事實を事實として語るのに、何故六ケ敷かと思はれますが、例へば春と云ものを說明すると

□

しても、是は容易に云ひ現はせないのであります。藝術が尊ばれるのは、卽ち此の表現が六ケ敷からであります。それが心通り卒直に言ひ現せる樣になれば、餘程進んで居のであります。所が神樣の御受取りになるのは、其の表現の方ではなくして感じの方であります。從つてお

道に於いては、其の表現の如何と云ふ事よりも、其の實感の如何と云ふ方が大切なのであります。然るに多くの人は、其の表現方にのみ心を注いで、眞實の感じを其の儘云ひ現はす事をせないのであります。

露西亞のツルゲネーフと云ふ小説家の書いた本の中に斯う云ふ話があります。貴婦人と云ふ者は、一日中僞ばかりを云つている。何んとかして本當の聲を出さしてやりたいと思つて、或る時棒を持つて不意に叩き付けてやつたら、貴婦人は『きやつ』と叫んだ。其の時それだ〳〵それが本當の聲だと云つてやつた、と云ふ事が書いてありましたが、是れは甚だ面白い話であります。實際人間が本當の聲と云ふべきものは、言葉以上に迫つたものでなければ云ひ現はす事が出來ないのであります。

從つて、お道の御話をする樣な場合でも、相手の人の眞實が出る所まで話し込めば、其の結果は泣くか笑ふか怒るかより外無い事になるのであります。此の三つの中どれか〻現れたら、

理が分つたのでありまして、其の他の事は未だ眞實に徹底して居ないのであります。故に御道では申譯は口答へも同樣、と云はれて居るのであります。

其所まで迫つた心でお互ひに理解し合つたら、一家の內も極く治まるのでありますが、其所までつきつめて行かずに、互ひに口先きで嘘の云ひ合ひをするから、溝が出來たり誤解が出でたりして、不和になつて行くのであります。例へば夫婦の間でも、默つて居ればお互ひに仲の好い夫婦であるのに、無駄な事を云ひ合ふ所から喧嘩をしたり、仲惡くなつて離緣する樣な事が暫々あるのであります。是れは自分が夫なり妻なりを思ふ心を、正直に云ひ現はさずに自分を理解せしめ樣と、種々僞を云ふ所から起つて來るのであります。

斯樣に心にも無い事を云つたり僞を云ふのは、要するに自分自身で我身が苦しくなる樣にして居るのも同樣なものであります。例へば田舍へ行つて、好きでもないものを、好きだと云ふた爲めに、朝から晩まで同じ物を喰べさせられてる樣な事があるものであります。是れは一寸

した僞から自分の困る樣な一例でありますが、人生にもやはり斯うした樣な事が澤山あるのであります。故に人間は正直な事を云つて置かねばなりません。

然し時と場合に依ると、正直に物を云つたが爲めに、却つて惡るい結果を引き起す樣な事があります。是れは何故かと申しますると、凡ての人が僞で作つて居る時に、一人正直な事を云つたならば、其の計畫が破れるから惡るく思はれるのであります。然しそれは要するに一時の困難であつて、終ひには正直に何事も語る者が勝利を得べきものであります。故に少々の困難があつても、實際の事は其の儘語る樣にせなければならぬのであります。

殊に教理はそれに實つを添へねば理が働かんのでありますから、實際に自分が實行した上から話す樣にせなければなりません。さもなければ教祖に取つては、眞實の話であつても取次ぐ者には僞の話になつてしもうからであります。僞の話を取次いでいたら、神樣がお働きにならんから、云ふた話が又僞になるから、神樣も白いと云ふて賣つても、中あけて見て黑かつたら

如何するかと仰せになつた事もあります。卽ち助かると云ふて人に話を說いても、助からなんだら如何するかと仰せられたのであります。

左樣した間違ひの起らぬ樣にするのには、先づ自分が實行して其の眞僞を確めて置かねばならんのであります。それで此の道は拜み信心やない、敎の理をためしにかけて確かな證據を擔つて信心するのであるから、證據信心と仰せられてあります。斯うしたら如何な確かな事も云へるのであります。從つて天の理も其の心に添ふて、御働き下さるのでありますから、口と心と合はして行かなければならんのであります。

然るに苦いものでも甘いと云ふのは、要するに人間に僞を云ふているのでありまして、斯うした人は云ひ換れば人に臆病な人であつて、神樣に大膽な人と云はねばなりません。何故なら人が恐いから僞を云ふのであつて、神樣が心を見透して居られるのに、其の前で平氣で嘘を云つて居るからであります。然し斯うした心使ひをするのは、要するに未だ神樣が本當に分つて

るないからでありまして、是れが反對に、神を畏れて人に大膽になつて來たら、始めて信仰が出來たと云へるのであります。だから口では何んとでも云へると思ふて、心にも無い事は決して云はない樣にせなければなりません。

□

悟りと云ふのは、心から分る事であります。例へば他人が自分に對して種々なる迫害をするとする。其の時何故その人が左樣するのであるか分らない間は迷ふて居るのであつて。斯樣云ふ譯で斯うするのだと。其の人の心が分つた時に讀めたと云ふ、其の讀めたと云ふのが悟りと云ふのであります。

然し御道で云ふ悟りと云ふのは、人の心を讀むのではありません。神樣の御心を讀むのであ

りまして、それには二つの道があるのであります。一つは世上世界を眺めて、卽ち事實の上から悟るのと、神樣の御言葉から悟るのとであります。其の何れから悟つても要する所、神樣の御心さへ分ればよいのであります。

然し世上を眺め又は我が身上を思ひ、神樣の御話を聞たから、直ちに悟れるかと云へば、左樣は行かないのであります。例へば英語の本を見て、其の中には驚くべき不思議な事が書いてあつても、その文字を讀む事が出來なかつたら、其の文章も反古同樣のものであります。して見れば誰れにでも英語が讀めぬ樣に、誰れにでも神樣の御心が悟れるかと云へば左樣は行きません。英語を知つて居る者のみが英語が讀める樣に、神樣の御心は誠であるから眞の心を有する者のみが分るのであります。之れを平たく云へば自分の心にある事より何事に付けても分らないものであります。

或る時、私しは或る教會の詰所へ行きました。所が其所の壁が青い色にぬつてあります。私

しは二三度も其の詰所に行つて居るのでありますが、其の壁に眼が付なかつたのであります。然るに其の時に限つて壁が眼に付いたので何故だらうと考へて見たのであります。所が其の暫く以前に自分の家の壁を塗ので、左官と壁の見本を見ながら話し合た事があるのであります。それで私しは壁に付て少しの事を知つてから、他家へ行つても壁が眼に付く樣になつたのであります。

斯樣に例へ眼の前にあつても、自分の心に無い事は見る事も聞事も出來ないのであります。從つて神樣の御心を悟らして頂くにも、自分に眞實がなかつたならば、いくら勉强しても研究しても分らんのであります。唯眞の心から見える事が神樣の御心でありますから、自分の心を眞實化して行く事が、悟りの上には何よりも大切な事であります。

然し眞と云ふても皆同じだと云ふ譯には行かない、一時の眞もあれば、變らん眞もあり、大きい眞もあれば、小さい眞もあると云ふ風に、同じ眞と云ふても其の人の心に依つて樣々ある

のであります。故に悟らして貰ふ神樣にも、此方に違ひがあるだけ、其の內容に變りが生じるのは當然であります。例へば眞が小さい時は、停車場に立つて走つて來る汽車を見て居る樣なもので、始めは極く小さく見えるのみであります。然るに近づくに從つて、次第々々に大きくなつて、我が前に來たらば驚くべき大きなものになります。そして其の箱の中へ自分が這入つて、運んで行かれるのであります。

それと同じで、神樣も此方の眞が進んで行けば、丁度汽車の樣に人間にお近づき下されて、終いには自分が神樣の懷の中へ這入つてしまえるのであります。所が其所まで行くのには階段を登る樣に、樣々の道を通らねばならぬのであります。それ故に悟りと云ても樣々にあつて、昨年悟つたのと、今年悟つた所と異ふ樣に次第々々に進んで行くのであります。それを悟りと云ふても幾重の理があると仰せられたのであります。

□

人間が此の世に住んで行くのに、衣食の道が足らない事も困難なる事には相違ないが、それよりも苦しいのは人の心の中に住む事であります。人の心の中に住むと云ふのは、自分が人の心で左右される事であつて、斯うすれば斯う思はれるあゝすればあゝ思はれると、我が心で苦しんで居るのを云ふのであります。それが人の顏色を見たり眼付きを見て暮すと云ふので、是の苦しみは實に堪えられないものであります。

斯樣に人の心で自分が苦しむと云のは、要するに自分の心が人に使はれるからであります。自分の心が神樣に使ふて頂けるやうになつたら、此の苦しみから逃れる事が出來るのであります。卽ち人に何んと云はれても神樣が見て居て下さると云ふ自信さへあれば、何んの恐れる所もないのであります。然るに多くの人は此の信念が無い爲めに、人の云ふ事を聞いては我が心

を痛め、人のする事を見ては心を廻して案じて居るのであります。それが日々に心を休む間なく使ふのでありまして、終いには身にかゝつて來るのであります。

此の物を氣にしたり、はつと思ふ心は人が此の世を渡る上に、大變な損をせなければならぬのみならず、お助けに行た場合などは殊に禁物であります。何故なら神樣の理を取次がして頂く場合に、相手の顏色を見て物を思ふたり、又は云れた事にはつと胸をついたりしたならば、折角の御話の理が直ちに消えてしもうからであります。それで左樣した弱い小さい心では未だ〳〵いかんと仰せられるのであります。

例へば御助けに行つて先方が位の高い人であるとか、金持とか學者であると云ふ樣な時に、相手を見て若し斯う云ふ樣な事を云ふたら氣にせられまいか、何んとか笑はれる樣な事はなからうか、などゝふと思ふたならばそれだけ知らず〳〵の間に、天の理を心で押へて居るのでありますから、天の理が働かなくなるのであります。斯う云ふ譯でありますから、如何なる場合

にも心が動かぬ樣に、日頃から心を治めて居らねば、さあと云ふた時に困らねばならぬ事が出來て來るのであります。

又た折角御話を聞いて懺悔をしても、人の顏色や眼付きの爲めに其の懺悔の心がいつの間にやら消えてしもう事があります。故に如何なる時にも物を氣にしたり案じたり、思ひ過したりせぬ樣に日々心をつけて行かなければなりません。それで人見てほつと思ふ樣な事ではならん心に眞實があれば必らず心が定まるものでありますから、眞實の心を出して行かねばなりません。

□

お授けと云ふのは如何云ふ事であるかと申しますると、是れは教祖が二十五年の壽命を縮めて、此の道を世界に早やく廣めたいと云ふお心から、九十歳にして御歸幽になつたのであります。其の御德に依つて助け一條の功能の爲め、此の御授けを御渡し下さる事になつたのであります。

然し是の御授けを御渡しなさるに附いて、始めの間は一人吟味をなされたので、それは如何なさつたかと云ふと、神樣は病氣になつたら連れて出よと仰せになつた。それで病人を連れて出ると、神樣が御授けを下されたのであります。

後には別席を運んで御授けを頂く樣になつた、けれども是れも始めの間は嚴重で、若し別席を九度運んで來ても、心の掃除が出來て居なかつたならば、神樣は又始めから運び直せと仰せになつて、二度運んで貰へる者もあれば、三度も運ばねばならぬ者もあつたのであります。

斯樣に以前は御授けを御渡しになるのが、至極嚴重であつたから、從つて昔しの御授けは功能が多かつたのであります。所が心の澄ん者はたとへ本部に居る者でも、お授けが頂けぬ處か

ら、口では云はいでも心で不足を云ふ樣になつた。神樣としては人に不足をださすのが殘念であると云ふ所から、其の後は誰れ彼れなしに別席を運んで來た者には渡してやる、そのかはりに心次第の働きをすると云ふ樣に、功能の理が變つて來たのであります。從つて人に依つては其の效果が少ないのは止むを得ません。

其お授けとは如何云ふ事であるかと申しますると、水晶の樣なきれいな心へ、天から水晶の樣な理を渡すのであると仰せになつて居る。して見れば九度の席を運ぶと云ふのは、自分の心を掃除して貰ふのであつて、掃除が出來た其所へ、神樣の席を頂くのであります。神樣の席と云ふのは、さあと云ふ時に神樣の入り込んで下さる席を云ふのであります。是れは或る先生が此の御授けを頂きたいと、普通で云へば催促せられた時に、席々と云ふても心に席なくばなにもならんと仰せになつて居る。是れから思ふと、席とは神樣の席である事が分るので、又たさあと云へば月日の代理とも云ふたると仰せになつて居る事もあります。すれば天の理を頂くと

云ふのも、月日の席を頂くと云ふのも、同じ理になつて來るのであります。

斯う云ふ譯でありますから、御授けを頂く日には、誰しも出來るだけ自分の心を懺悔して、埃などは心に止めぬ樣に勤めて居るのであります。それで神樣は其のきれいな心を持つて居る日、卽ち一日の日に生涯の理を定めよと仰せられるのであります。

生涯の理と云ふのは、一生の事を云ふのであります。それを定めると云ふのは、生涯變らん迷はんと云ふ心を定める事を云ふのであります。何故なら一日の日は最も澄み切つた、神樣の前へ出る日でありますから、此の日の心を變らんやうにすれば、天の理も變らずに、何時迄も神樣の十分の理を頂く事が出來るからであります。所が多くの人は、直ぐ其の心を變へてしもうから、天の理も變つて來て、神樣の御守護が無くなつて、授けの功能が消えて行くのであります。それを神樣はそれを門口で落して行く者もあれば、箱へ入れてなをして置く者もあると仰せになつて居ます。

落したりなほしたりせずに、功能を積んで行こうと思ふたら、生涯其の心が狂はんだけの心を、一日の日に於いて定めて置かなければならんのであります。お授けは人間の身體と同じで使ふたからとて無くなるものではなく、へるものでも無いので、使へば使ふ程其の光が增して來るのでありますから、其の理の消えんやうに、生涯持ちつゞけるだけの、強い心を定めて置かなければなりません。

□

御教祖は五十年間御苦勞の道を通つて、此の道をお付け下されたのでありますが、其の長き年限の間、一度も教祖は道を說く爲めに、屋敷を離れて御旅行になつた事はありません。世界の子供を必らず伴れもどつて、地場の土を踏ますと仰せになつて、世界から道を慕ふて屋敷へ

歸つて來るのを、長い間ぢつとお待ちになつて居たのであります。故に此の道は他の宗派の開祖の樣に、傳道せられて出來て來たのではなく、御教祖の德を慕ふて人々が集まつて來たのであります。それは丁度寒い日に火鉢に火がくわん〳〵おこつて居れば、人々が火鉢の側に集まつて來るやうなものであります。

然し斯うやつて御教祖が人々の來るのを待つて居られたのは、其の心中に大なる自信があつたからであります。そして斯うした強い大きい自信が生れて來のは、それだけの大きい強い眞實があつたからであります。何故なら自信とは、要するに自己の眞實に比例して出て來るものだからであります。して見まするとと教祖の自信は、他の宗派の教祖や開祖より強く深かつただけ、其の眞實が徹底して居たと見る事が出來るのであります。

是れだけの自信がありましたから、教祖は在世中布教の困難から政府の認可を得たらばと、人々の云たのに對して親が子に賴むと云ふ理はないと仰せられて、認可を取られなかつたので

あります。是れが爲めに御教祖の御苦勞は甚だしくなつて、幾度となく拘留せられたり監獄へ行かれる樣になつたのであります。けれども其處に、教祖の尊い所があるのでありまして、若し早やく認可を得て居られたならば、今日の本教の盛大を見る事が出來なかつたかも知れぬのであります。

斯樣に教祖は强い自覺の下に立て、獨自の道を付けて行かれたのでありますから、教祖を雛形として通る者も亦た此の心がなければならぬのであります。神樣も亦た心の無い者に話はするなとも仰せになつて、聞して貰ふと云ふ心の無い者に、話をするのは丁度石の上へ種を蒔くのと同じであるからと、お止めになつて居たのであります。然るに近頃の布教者は、其の反對に相手が道を聞きたいと思ふて居ぬ者にも、無理に聞かさうとする者があります。斯うして教理を容易に說くのは、一面御教祖御苦勞の理を輕んじて居のでありまして、大なる冒瀆と云はねばなりません。

それよりも自分が日常の行ひを眞實にして、それを見り聞いたりした所から、自然に人が集まつて來る所まで辛抱して、理を吹して頂かねばならぬのであります。それを賴み步るくと云ふのは、一寸考へたら熱心の樣ではありますが、實は理を誤つて居のでありまして、根のない草木と同じで、一寸は見られても直ぐ捨てなければならんのでありますから、此の事をよく心に治めて置かねばなりません。

□

神樣を自分の心の的として、其の行爲を愼みながら通つて居ならば、心は必らず淸々して勇んで來に相違ないのであるが、大空に時々雲がかゝる樣に、人間の心にも雲が現はれて來るのであります。それは何んであるかと云へば人間心であります。人間心と云ふのは如何云ふ心で

あるかと申しますると、人間を相手として我が心に湧いて來る理を云ふのでありまして、此の心が出て來ると知らぬ間に心がいづんで行くのであります。

尙ほ是れを詳しく申しましたら、大空を見て居る樣な心持ちで、何にも知ずに暮して居たらばよいのでありますが、人間にはつまらぬ知識があるのであります。そして其の心を使ふ爲めに、却つて我が心を我が心で束縛して難儀をするのであります。若し何にも知らなかつたら、大膽に出來る樣な場合でも、くだらない人間心から思案をする爲めに、何んとなく前途を恐れて思ふ事を思ふ樣に斷行出來ない結果、神樣の御守護を頂けぬ事があるのであります。故に人間は少しの知識や智慧などを捨てゝ、無知と云はれても何と云はれても、そんな事に心を煩はさぬ樣になつて何事も大膽に行ふ樣にならねばならんのであります。それを神樣は成人半ばに思案と云ふ理でかけたら、如何もならんと仰せになつて居ます。

更に又た、此の人間心は御助けの場合に於て、殊に氣を付けなければならんのであります。

何故なら御助けをする時少しでも、此の人間心が出なら、決して神樣の御助けを頂けぬからであります。例へば病人の樣子を見たり、其の家の有樣を見て、それに少しでも我心が動かされたら、天の理が鮮やかに說けぬから、從つて神樣の御守護が薄くなつて來るのであります。だから斯した時には決して心が動かぬだけの修養を、日々に積んで置かなければならんのであります。

何故なら此の案じると云ふのは、要するに物が窮するから起るのでありまして、例へば碁でも將棋でも勝つて居る間は少しも考へぬが、敗けて來るとよけい考へる樣なもので、人間が此の世を通つて行くのに、順調に進んで居る間は案じたり心配はしませんが、それが惡るうなつて來るから考へ込むのでありまして、世の中の學問などは斯うした所から出來て來たのであります。故に案じると云ふのは、丁度延びて行かうとする心の芽を、止めて居るのと同じでありまして、云ひ換へれば自分を滅ぼしてゐるやうなものであります。

故に人間は如何なる場合にも、人間心を捨てゝ、眞實の心になつて行かねばなりません。眞實の心と云ふのは、神様を相手として、心に湧いて來るのでありますから、此の心になれば何時も喜びが心に出て來るのであります。喜びが出て來るのは、丁度曇つた大空が晴れて、太陽の光が見られる樣なものでありまして、心が勇んで來るのであります。

□

御教祖は嘗て人間の通つた事の無い、新しい道をお付け下されたのでありまして、其の道を歩るいて行くのが、此の道の信徒であります。それと同じ樣に、土地所々に於いて、始めて此の道を聞いた人の通る道を、又た其の信徒が付いて行くのであります。ですから先に立つて通る人の通り方が、後につてい來る人の通る道を規定してゐるので、例へば物を縫ふ時、先に立

つ針が曲んだならば、其の後から付いて來る糸が、全部針の曲んだ樣に曲んで行く樣なものであります、だから先に立つた者はよく自分の通る道に、通り誤りの無い樣に注意して行かねばなりません。

所が人間の眼に見える道を歩るくのも同じで、心の道に於いても人を案内して連れて通るには、自分が一度通つて置なければ、人を案内する事が出來ないのであります。例へば始めて京都へ行た者が、東山は何處にあるのやら西山は何處にあるのやら少しも知らないで、それを案内する事は出來ません。たとへ一度でも來たか少しでも住んで居たことがなければ案内出來ない樣に、此の道もやはり先に立つ人が、一度は其の道を自分が通つて置かなければならんので、それを神様は我身ためしにかゝりたる上と仰せになつて居るのでありまして、御教祖も自分行ふて人に敎へられたのであります。

從つて、先に立つ者は自分一人で通るだけの覺悟がなければなりません。連れがあればと云

ふ樣に、連れを探して居る樣では此の道は通れません。殊に此の道は眼に見える道と異ひまして、眼に見える道なら分らなくなつた時には、人にでも尋ねたら直ぐ自分の行く先を敎へて呉れるが、心の道では却つて間違ひを敎へて呉れるものでありますから、理のある人以外には道を尋ねてはならんのであります。

私しが敎會を持つて居た時、廿圓の家賃が治まらぬ所から、四十圓の家賃の家へ移轉し樣と云ひ出した事があります。然るに役員は皆反對でありましたが、私しは終ひにそれを斷行致しました。其の結果四十圓が樂に出來る樣になりました。是れは廿圓の時には廿圓ぐらいと輕んずる心がありましたから出來なかつたので、四十圓の所へ行つた時には何んでもと思ふ心がありましたから出來たのであります。斯樣に世界の道理と道の理は違ふのでありますから、人に尋ねたら間違ひより敎へて呉れぬのであります。

故に自分が一人通る心になつて、後について來る者より、多くの苦勞をせなければなりませ

ん。何故なら育てるのは心を育てるのであつて、要するに如何なる苦しい所でも喜んで通るだけに、育なければならんので、それには先に立つものが、より以上の苦しみを通つて見なければ、人々が滿足して付て來ないからであります。されば人が一貫目の苦勞をすれば、自分は五貫目の苦勞を喜んで通ると云ふ心になつて行くのが、後々を滿足に育てゝ行く道であります。

□

美くしう澄だ水の中に、少しの埃でもあつたら、人々はそれを飲ぬ樣に、神樣も人間の心に埃があつたら御受取りならんのであります。それ故心に埃の付ん樣に、日々心の埃を拂ふて通らねばならんのであります。又一つには汚ない濁つた水の中なら、少々埃があつても泥が這入つても分らぬが、澄んだ水の中は少しの埃でも眼に付くのであります。

以前或る教會の會長をして居れた方が、お地場へ來られると病氣になり、自分の教會へ歸られるとよくなるので神樣にお伺ひせられたら、濁つた所では埃は分らんが、澄んだ所へ來ると埃が眼に立つと云ふ事を仰せられたことであります。

斯樣云ふ點から考へますると、同じ樣な間違つた事をしても、世界並の人がするとそれが身にかゝらずに、道の人がすると直ぐ身にかゝるのは、それだけ心が清いからであります。卽ち是れを云ひ換へますれば、行爲に於いては神樣に叱られても、其の品性に於いては神樣に認められて居る事になるのであります。故にたとへ小さい心の間違ひでも、それを神樣が叱つて下さるだけの、澄んだ心にならして貰はねばならぬのであります。

尙ほ是れを例へて申しましたら、奉公人でも主人によく仕へる者は、主人によけい使はれ又主人からよけいに叱られねばならんのであります。けれども是れは其の奉公人が間に合はぬからではなく、却つて間に合ふからであります。それと同じ事で神樣の御心に適ふた者は、それ

だけ多く手入れをせられるのであつて、心に適はぬ者は捨てゝ置かれるのであります。捨てゝ置かれるのは樂にせられるのではなくして、却て苦しみの理を見せられて居るのであります。

其のかはりに次第に心が澄て來たら、神樣が、其の身の內に入り込んで種々と御教へ下さるのであります。例へば人に間違つた事を諭したら、其の間違ひを身を以つてお知せ下さるし、凡て神樣が其の心に悟の付く樣に守護して下さるのであります。故に如何なる所へ行かうが、神樣がついて居て下さるのも同じであつて、少しも心に恐れる事も案じる事もなくなつて來るのであります。されば何事も神樣の思召し通りに、なる樣に勤めて行かねばならぬので、それには心から埃を取つて澄まして行かねばならんのであります。

そして世界並なら病氣やと苦しんだり、くどいたりするのであるが、道では却つて反對に神樣が身を以つて心を御仕込み下さるのを喜ぶのであります。そして我が心を澄まして、理を悟らして頂く樣になつて行かねばなりません。

□

廣い心と云ふのは、隔ての無い心であります。自分と他人と隔てをしたり、自分の家と他人の家と隔てするのは、小さい心であります。此の隔て心が出て來ると、あちらでも隔てこちらでも隔てる結果、四方八方隔てが出來て、隔ての中で自分が苦しんで行かなければならなくなつて來るのであります。其の結果段々小さくなつて來ると、直ぐ腹が立つたり、氣が鬱いだり人を苦しめたり、自分が苦しんだり、病氣を心から招くやうになるのであります。

それで大きい心を持つて通らねばならぬのでありますが、大きい心と云ふのは、大海のやうな心であります。大海は如何な泥水が川から流れ込んでも、それに依つて濁ると云ふ事はありません。人間も心が廣く大きかつたら、人の云ふ事やする事に、腹を立てたり氣を病む樣な事

が無くなります、それが大きい心であります。

神樣は人に惡口云はれたり、人に苦しい目に合はされたりして、其の爲めに苦しんだり病んだりするのは、相手の出したものを貰ふ樣なものである。人に差し出した物を先方が受取らなかつたら、自分が持つて歸るより仕方がない。そこで持つて行つたのと持つて歸つたのを合すと二倍になる。是れと同じで人が惡るく云つても、それを受取らなかつたら、相手が持つて歸つて二重の埃を積むのであります。故に神樣は中言を云ふのは重罪と仰せられたのであります。

所が多くの人は斯う云ふ心になれないので、見ては思ひ聞いては思ひ、それからそれへと心で苦しみを、求めて居るのであります。そこで神樣は顏見てほつと思ひ、人見てほつと思ふやうでは、まだ〳〵いかんと仰せられたことがあります。

そこで大きい心を持つて居るのと、小さい心を持つて居るのとは、人を助ける上に大變な相

違が出來るのであります。小さい心は自然に人の心を苦しめて居るから、よし人の病氣を助けても、小さい所へは人が澤山集まらぬのであります。從つて教會にしても個人にしても榮えて行かないのであります。之れに反して心を廣く大きう持つて居れば、其の大きい心が自然に人を助けて居ますから、多くの人が集まつて來ます。從つて教會にしても個人にしても榮えて行く道理であります。故に大きい道を附けさして貰ふ、多くの人を助けさして貰ふと思ふたならば、先づ自分の心を廣く大きうするやうに、修養して行かなければならぬのであります。

□

人間の言葉と云ふものは、相手へ心を通じる爲の道具であるから、話しが上手であればそれだけ、自分の心が先方の心に通じる道理であるから、言葉を上手に使ふ人程心が十分に通じる

筈であります。所が御道の事になるとそれが左樣云ふ譯には行ないのであります。何故と云ふのに、成程言葉が上手であつたら、事柄を明瞭にする上には是れ程好い事はなく、又た人を感動せしむるにも言葉が上手でなければなりませんが、それだけでは未だ御道の話としては十分と云ふ事が出來ないからであります。

すれば如何すれば好いのであるかと申しますと、話す言葉に添て神樣が御働きにならねば、道の話としては十分と云ふ事が出來ないのであります。いくら事柄が明瞭になり道理が明らかになつても、神樣の御働きがなかつたらそれは世界並の話であつて、神樣の御話ではないのであります。だから如何しても神樣が御働が下さる樣に話をせねばなりません。

所が神樣と云ふのは眞の心を受取つて御働きになるのでありますから、言葉が如何に巧みでも、先方の心に誠の理が湧て來なかつたら、神樣はお働き下さらぬのであります。けれども人の心に誠の理を湧すのは是れは言葉だけでは行かぬ。例へば筋目の通つた話を聞いていても、

自分の心の底に左樣云つたつて左樣は行くものではないと云ふ樣な心が起る事がある樣に、却つて話の裏を考へて居る樣な事があります。若し話をしながら相手が左樣云ふ心で聞いて居たら、それこそ千萬言を使つても何んの役にも立たんのであります。是れは要するに話す人の日常が心と言葉と異つて居るから、其理が寫つて相手の心に左樣した理を湧かすのであります。

斯う考へて來ますると相手の心に誠の理を湧かすのは、自分の心が誠になつて居なければなりません。自分の心が誠であつたら、其の話す事が或は間違つて居樣な事があつても、心の理が先へ通じますから、人の心に誠の理が湧いて來のであります。ですから道を長らく通られた方の話は、今の人の樣に長い話はせられませんが、一言の言葉が聞く人の心の底にまで浸み込んで離れずに、何時迄も心の底から働いて來のであります。是れを御道では理が働くと云のでありまして、是の理が働く樣にならなければ、大きい働をさして頂く事は出來ないのであります。それには自分の心を誠にせなければならんのでありまして、神樣も言葉は其の場だけのも

の、理をこしらへてこそ人が聞であろうと仰せになりました。

御教祖も御在世中は左樣大した御教理は御說きにならず、一と言か二た言御諭しになるばかりでありました。然し理がありますからそれを聞た人は、一生忘れる事が出來ない樣に心に止つたのであります。是れ卽ち理が働くので、教祖が寢て走れと仰せになつたのは、此の理を仰せられたのであります。

然るに近頃では人々が詳しく教理を說く樣になりましたが、これは要するにそれだけ心が濁つて理がなくなつたから、それだけ云はなければ自分が滿足出來ないのであります。又布教者が立派な着物を着て歩るくのも是と同じで、つまりは自分の心の足らぬ所を、言葉や着物で補ふて居のであります。眞に心に眞の理があれば、言葉は少なくとも着物は破れて居ても、それで滿足が出來る樣にならなければ、眞實の理を働かす事は出來ないのであります。口や辯が達者でも眞の御道には何んの役にも立たんのであります。

□

神様が理が無れば理がないと仰せになつた様に、自分に理がなかつたら、其の理が表へ現れて來る譯がないのであります。其所でお道では何よりも自分の理を造るのが、大切な事になつて居のであるが、その身に付く理と云ふのは何處にあるかと申しますると、それは元一つより理は無いと仰せられた通り、理は唯地場によりないのであります。その理が世上へ寫つて澤山の教會になつて居るのでありますから、其所をよく考へてみなければなりません。

然らば元一つの理から、今日理を頂くには如何したら好かと云ふと、眞實の心を以つて元一つの理の爲に働くよりないのであります。卽ち云ひ換ればお道の爲めに、十分の働きをさして頂くより外にないのであります。然し如何に御道の爲めに働いたと云ふても、眞實の心から仕

へたと云ふても、それが一時的のものであつたら何にもならんのであります。

例へば奉公人が主人の爲めに眞身になつて働いたからと云ふても、それが僅か一と月か二た月で終つてしまたならば、主人の信用を得る事は出來ません。少なくとも三年は心棒して働かねば、主人から信用はせられ無のであります。それと同じ事であつて、お道でも一時非常に熱心になつてもそれが續かなかつたら、神様にその眞實を受け取つて頂く事は出來ないのであります。

それでお道では年限と云ふ事が重大になつて來のでありまして、年限を通つた者でなければ柱にならんと仰せられた様に、如何に道の年限の若い者が、勢ひが好いからとて柱にはならんのであります。柱になるには年限をとつたものでなければならぬ様に、道に於いても如何なる道も通つて來た者でなければなりません。

それは何故であるかと申しますと、年限の道を通つて來た者でなければ、年限の理が分らぬ

からであります。年限の理と云ものは是を小さく云へば、旬刻限の理でありまして、道は此の刻限の理から出來て來たので、それを大きく云へば天然自然の道と云ふのであります。と云ふのは御教祖御在世中は云ふ迄もなく、御本席在世の時も、時旬の刻旬を御出になつたのであります。是れを分り易く云へば、百姓が田の仕事をするのには今は種蒔の時である、今は田植の時である今は修理の時であると云ふ樣に、時々の旬に應じて働く樣に、神樣が人間の働くべき旬時を御知らせ下さるのであります。それに從ふて人間が働いて行くのであります。今は此の刻限の理が無なつて居ますから、お地場に現れる理を見て、それを其の時の旬と思ふて通るより外はないのであります。何故なら地場は天理王命でありますから、地場で出來る理は神の思召しから現れて來るものだからであります。所が此の理を忘れて地場と心を一つにして働かぬ者は、神樣の爲に働いて居るのでありませんから、自然衰へて來るのであります。

然し兎に角何事も此の旬を見て働かねばならんので、一年は一年の理があり、二年は二年の理

があるのでありますから、旬時の理が重いと同じ樣に、此の年限の理も又た重いのであります。故に是の年限の理を通つた者でなければ深い理は分らぬのであります。それを神樣は年限の實と仰せられたのであるが、唯年限古いばかりで眞實の心を持つて通らなかつたら。それは實がないのでありますから從つて理も添はんのであります。年限を古く心に眞實を治めて通つたら心に理が付くから、其の理が世上に現れて來るのであります。それが卽ち德であつてお道では德を理とも云ふのであります。

□

因緣と云ふのは世界で云ふ運命と同じ樣な意味に解せられて、私しは惡るい因緣の者でありますとか、私しは不仕合せな因緣の者であるとか申しますが、其の多くは因緣を客觀的に見て

爲るのであります。客觀的と申しますと、因緣が外部にある樣に考へるのでありまして、例へば自分は親に早やく別れたとか、身に病氣があるから家が貧しいから、それで自分は因緣が惡るいと云ふのであります。けれども因緣は左樣した外部にあるのではなく、自分の內にあるのであります。

心通りの守護と神樣が仰せになつた樣に、自分の心にある理が表へ現れて出るのでありますから、惡因緣と云ふても善因緣と云ても、それが外にあるのではなく、心の內にある理が現れたのであります。すれば心の因緣とは如何云ふのであるかと申しますると、是れは止めねばならぬと思ふても、止めるに止められん好きな心、卽ち前生から使ひ慣れて來た心でありますから、是れを因緣と云ふのであります。例へば生れながらにして字をよく書くとか聲が好いとか云ふのは、前生の理が現れて來て居るのであります。其所で其の因緣も惡るい事のみではないのであります。例へば人の子でも自分の子でも愛したいと云ふ心が切るに切られぬならば、そ

れは善因緣でありまして、酒を見れば止めよふと思ふても止められぬと云ふならばそれは惡因緣であります。

然し此の善惡と云ふ事は別に定まつてあるものではなく、其の人々に依つて異ふのでありまして、それは丁度寒いと暑いと云ふのと同じであります。同じ事をして居も、一人には惡るい事でも他の人にはそれが惡るくない事もあります。それは一人が風呂であついと云ふて居も、他の一人がぬるいと云ふかも知れないのと同じであります。要する所はその人の生命を保持するものは善であり、其の人の生命に危害を加へるものは惡となるのであります。

故に實際の場合に或る事は自分の爲めになる事もあれば、或る事が自分の不爲めになる事もあるのであります。故に同じ因緣と云ふても好い因緣もあれば、惡い因緣もあるのでありますから、白因緣は喜んで通り惡因緣は心から切つて行くので、それは思ひ切る理に依つて切れて行くのであります。

□

お道を聞かして頂いた以上は、何事をするにも自分が此の世へ出て來た、勤めであると云ふ心で働かなければならんのでありまして、是は人の事だから此れは自分の事だからと思ふてはなりません。何故なら人の事であろうが自分の事であろうが、したその事は早やいか晩いか消えるのでありまして理だけ殘るのであります。その理と云ふのは各自の心に付いて來るのでありますから、我が事でも人の事でも別け隔てなしに働いたら、其の理が自分に添ふのであります。

それで神樣は人の事をしても斯うしてやつたとか、彼してやつたとかと云ふ事は云ふてはならん、斯うさして頂いた彼あさして貰つたと云へと仰せになつた。是れは仕た仕事は人に渡して其の理を自分が貰ふて來るのを云はれたのであります。それで御道では貰つたとか頂いたとか云ふのであります。

尙ほ是れを分り易く申しましたら、何事でも一心になつて聞けば、それに對して特別の知識が發達して來るものであります。それは人の事であろうが、自分の事であろうが同じ事であります。其所で仕事は濟んでしまつても、其の知識は返へす事も捨てる事もなく、自分の物になるのであります。

更らに又た一家の上で云へば、奉公人でも一心に働いて居れば其の事に關しては、其の者に尋ねなければ何にも分らぬ事になりますから、終いには其の者に凡てをまかせてしまふ樣になるのであります。是れと同じで神樣の事でも自分の事の樣に思ふてやつて居れば、終いには其の者にやらさねば治まらぬ樣になつて來るから、我事と思ふてしたら後ちには我が事になつて來るのであります。故に何事に付けても人とか神とかの爲めに働いて居ると思はずに、自分自

身の事をさして頂いて居ると思ふて、一心にならねばならぬのであります。

□

鏡屋敷と云ふのは御地場の事で、世上世界の理が皆お地場へ寫つて來るから、斯樣仰せられたのであります。然らば世上の理が如何云ふ風にお地場に寫るのであるかと申しますと、それは子供の心が親の心に映る樣に寫つて來るのであります。其の寫つて來た所から、神樣が種々と御話し下されたのが、天啓となつて現れて來たので、それを御差圖と云ふのであります。

御教祖御在世中の時は云ふ迄もなく、御本席が御差圖下される當時に於きましては、お地場が鏡屋敷であるなどの説明はする必要がなかつたのであります。所が御本席の御歸幽後は、天啓が無くなつて終ひましたから、其の説明をする樣になつて來たのであります。何故なら御本席

の御在世中には、百里千里離れた遠方の人が地場へ來て御本席の前へ出ると、千里の外を見て居る樣に御差圖が有たのでありますから、鏡屋敷と云ふ事を疑ふ人はなかつたのであります。

然るに現在ではそれがありませんから、何故と思ふ人が無いとも云へません。けれども是れは要するに天啓が止まつたゞけで、世上の理が地場に寫る理には變りはないのであります。是れを例へて云へば、何か私しが病氣にでもなつて言葉が出なくなつても、私しは眼で物を言ひ耳で聞き心で思ふ事が出來るやうに、神樣の御言葉である天啓は止まつてしまひましても、地場に寫る理には少しの變りはないのであります。唯それが言葉に出ないだけで、寫る理には變りはありません。それを思はずに地場を輕く思ふのは大層な間違ひであります。

又事實の上から見ましても、此の理は明らかなのであります。と云ふのは各教會に致しましても信徒に致しましても、お地場に盡したゞけの理より頂いて居ないと云ふ事であります。即ち如何に努めても働いても、夫が地場の爲めになつて居ない時は、其の教會その家に少しも御

守護が現れて居ないのであります。是れから考へましても心の理がお地場に映つて、神様が其の理だけ御返やしになつて居る事が會得されるのであります。是れは要するにお地場へ教祖五十年の理を、お伏せ込みになつて居るからであります。

斯う云ふ譯でありますから地場の理は鮮やかでありまして曇りはないのであります。それは丁度太陽に曇りがないのと同じであります。然し大空に曇りがある樣に、地場に居る人の心には時に曇りが生じるのであります。これは人間である以上止むない事であります。そこでお地場の理と地場に住む人間の理とを一つにせん樣にして、地場の理を尊んで行かないと、大變な取違ひをする事があるのであります。唯お地場だけではなく各教會に於いても其の通りでありますから、理と人とを一つにせぬ樣にして行かねばなりません。

□

人間の手で造るものは一見美しく見えるけれども、造花の如く日と共に惡るくなつて行くものであります。然るに天然自然に出來るものは、何時迄も其の美を失はぬのであります。殊に人間のなす所は生命がありませんから、其の時限りでありますが、自然に出來て來るものには生命がありますから、今年花が散つても來年又た咲きます。斯樣に自然に出來たものは年々成長して行くのであります。

人間が此の世を通るにも、此の天然自然の理の通りに通つて行けば、美くしい道が通れるのでありますが、自然の理に通らずに勝手な心を出して通るから、一時はその事が出來てもそれは造化の樣になつてしもうのであります。これは全く人間がせくから斯う云ふ事が起つて來るのであります。即ち天然自然の理に添ふて行けば、人間が心で思ふ樣に早やく出來ない所から、無理に人間の手でしてしもうのでありまして、其の結果却つて事實は遲れてしもうのであります

す。

何故なら天然自然ほど早やい理は無いからであります。と云ふのは人間はいくらよく働く人でも、休む時もあれば寢る時もあります。然るに此の天然自然と云ふ理は、昔から一分間として休んだ時がないのであります。人間が寢て居る間でも身の内に入り込んで働いて居るならこそ、人間は生きて居られるのであります。だから此の天然自然の理に添ふて通つて行く程早やい事はないのであります。

是れを御道の上に付いて考へましても、天然自然に人が付いて來るのを待つて道を付けて行つたら、其所には生命がありますから捨てゝ置いても、教が榮えて行くのでありますが、人は天然自然にやつては遍れる樣に思ふ所から、つひ人間心を出してあせるのであります。心をあせらずと云ふのは之れを心の中へ這入つて考へましたら、其の事が出來ないからあせるのであります。心であせらず自然の儘に通つて行つたならば、却つて理が早やく現れて來る樣になる

のであります。

そして又た其の結果に就いて考へましても、人間心でし上げたものは手入れをして居なければ塵がかゝるやうに、付いて來た信徒も常に心を付けて居なければならぬやうになり、又た其の付けた人が死にでもすれば、それで道が止まつてしもうのであります。是れは人間心からしたものであるから、其の根がない草木の樣なもので枯れるのが當然なのであります。從つて立派な實を結ばないのは造花の花と同じであります。然るに生きた花ならば花相應の實を結ぶことが出來るのでありまして、それは人間が味付ける事の出來ない、特有の味を持つて居るものであります。されば人間自ら如何して斯うしてと云ふ心を持たず、何んでも天然自然の理に添ふて、日々なつて來る理を樂しんで行かねば、奇麗な道は付いて來ないのであります。

□

人間が此の世に於いて苦しむのは、互ひに人を見合ふ所から起るのであります。世界では八方ふさがりなどゝ云ふ事がありますが、是れは人間の心の眼が人や物に付いて居るから、ふさがつて來るのであります。然したとへ八方ふさがつてあつても天だけはあいているのありますから、如何に苦しい境遇にある人でも、大空のみは見る事が出來るのであります。其所で神様は大空を見よと云はれるのであります。

然らば大空とは如何云ふものであるかと申しますると、廣々として如何なるものでもその中に入れても充たないものであり、又た如何なるものが出ても其の影を止めないものであります。そして時には雨を降らし風を吹かせて、地上の萬物を育てる所のものであります。其の大空を見て居る時の様な大きな氣持になつて通つたならば、日々近づく理であると仰せられるのであります。

日々近づく理と云ふのは如何なる事を云ふのであるかと申しますと、是れは人間がお互ひに心から打ち解けて、近づく事が出來る事を云ふのであります。すれば何故大空を見て暮す心が、人々の近づく理になるのであるかと申しますと斯う云ふ譯であります。

人が人を見る場合には人の長所と短所とをお互ひに見るものであります。そこで人の悪い所を見ると云ふ事は、見るだけそれだけ知らず〳〵の間に、相手の人をよし口で云はなくとも心ではせめて居る事になるのであります。人間は我身の欠點を見られる事は、何より苦痛でありますから、見られた相手の人は又た見られたゞけ、見た人を悪るく思ふものであります。斯うして人と人とが仲悪るくなつて、其の間に溝が出來たり隔てが出來たり垣が出來たりするのでありまして、是れが日々人間が遠ざかつて行く理になるのであります。

是れに引き換へ人の欠點を見ないと云ふ事は、知らず〳〵の間に人の間違ひを許して居る事になるのであります。人間は自分の欠點を見られる事が辛い事である如く、自分の間違ひを許

される事は一番嬉しい事であります。それ故人の欠點を見ない樣にして行く事が、互ひに近づいて行く理になつて來るのであります。

そこで空の理卽ち天の理を見て樂しんで居れば、人の事が眼に付きませんから、知らず〳〵人の罪を許して居る事になつて居るのでありまして、左樣した心持で居る事は、一寸見れば阿呆の樣でありますが、それがお互ひに近づいて行く理になるのであります。

斯樣な譯でありますから、一見した所阿呆に見る樣になつて行くのが、人をして氣安くさすのであつて、それが知らず〳〵人を助けて居るのであります。賢しこく遠慮して人に心を使はす樣なのは、神樣から見ると大きな埃になつて居るのであります。空の樣な大きな心になつてこそ、人が澤山集まつて來るのでありますから、大空を見て通る樣な心にならねばなりません。

□

人間一條の道理と云ふのは、人間が自分の心を土臺として考へた結果、人と人との間に出來て來る道理の事であります。神一條の道理と云ふのは、神樣の心を土臺として、神樣と人間の間に出來る道理を云ふのであります。そこで人間一條の道理を先に立てゝ、神一條の道理を後にするから、間違ひが多く起つて來るのであります。

例へば我が家我が身の治まりが付いたら、此の道をやると云ふ人がありますが、是れは人間一條を先にして神一條を後にして居るので、丁度自分が御飯をたべてから後に物を神樣に供へる樣なものであります。是れが抑々間違つて居るので、我が身我が家が自分の力で治められるものならば、神樣を信仰して、神樣の御力を借る必要は無のであります。我が力で我が身我が家が治まらぬから神樣を信仰するのであります。故に我が身我が家の事などは打ち捨てゝ置いて神一條の道理から卽ち神樣の仕事を先にさして貰ふて、我が身我が家の治め方神樣にして頂かねばならんのであります。それをせないのは丁度病氣が助かつたら、神樣の御用をすると云

ふのと同じで、これではめつたに助からぬのであります。

我が身や我が家の事は神に任せて置いて、神様の事をして居たならば、神様は必らず其の身其の家を御守護下さるのであります。私しの經驗から申しましても、神様の御用で外へ行つた時、少しでも家の事を心配したら我が身か子供が病氣になるのであります。是れは身體は神様の御用をして居ても、心は神様の御用をせないからであります。

先年も本部の青年の方々と一伴に或る教會へ行つた時、其の一人が病氣になつて困つた事がありました。其の時家の事を案じたのが悪るいのだからと云ふて懺悔をさしたら、直ちに御助を頂きました。是れ神様に知らず〳〵凭れぬ所から起つたのであります。

斯様な譯でありますから、何んでも神様の事を先にさして貰ふて、我身我事をせなければならんので、神様も我身我家から思案する理は、何よの事も受取る事出來んと仰せになつて居ります。だからこれは神様に添ふて來たらばよいのを、我が方から神様に添はずして、我身我家

から考へるのは、天の理を我が思ふ所に添はせ様とするのでありまして、是れが神一條の理と人間一條の理を、後先にして居るので、神様の御受取りがないのであります。

□

神様は人間の心通りの御守護を下さるのでありますが、それだからと云つて、思惑通りの道をお付け下さるのではありません。思惑と心とは一寸考へたら同じ様でありますが、思惑は心の一つの働きであつて、心全體ではないのであります。故に神様は凡て心通りにはお働き下さるのでありますが、人間の思惑や思案通りには御働き下さらぬのであります。

御教祖が御歸幽になる前、扉を開いて世界を六地に踏みならそうか、扉を閉めて世界を六地に踏みならそうかと、其の時御地場に居られた先生方に御尋ねになつた。先生方は開くと云ふ

のは好いが閉めると云ふのは面白くないと云ふので、何卒か扉を開いて世界を六地に踏みならして下さる樣にと御願になりました。教祖はそれを聞かれてそれは神の心に適ふた、なれど皆の思惑とは違ふでと仰せになつた。そして廿年の正月二十六日に御歸幽になつたのであります。是れ卽ち人間の思惑通り神樣の御守護あらせられぬ一例であります。

すれば心とは如何云ふのでありますかと申しますると、思惑や思案や其の他、心の働きの根本をなしているものであります。其の心通りに凡ての物が御守護せられるのでありまして、人間が見たり聞いたりするのは皆心通りの理が現れて居るのであります。一寸考へると人間の身に起る不幸や仕合はせは、皆外から現れて來る樣に思ひまするが、其の實は自分の心に其の因緣があつて、其の因緣が招いて居るのであります。例へば商賣人の所へは商賣に關係ある人が來るし、學生の所へは學問に關係ある人が集る樣なものであります。

其の他如何なる事でも例へそれが大きい事でも小さい事でも、皆な心の理が招いて居るので

ありますから、我が心さへ改めて行つたら、其の周圍も自然に改まつて來るのであります。然るに世の中の人は自分を改めると云ふ事をせないで、周圍ばかりを改めやうとするから、何時も反對の結果ばかり見て居るのであります。そして終いには世の中を悲觀する樣な事になるのであるますから、周圍の事に付いて考へるより、我が心を省みて行くのが第一であります。

其所で此の御道を付ける場合に於いても、人の心を奇麗に掃除して助け樣とするには、その事許りに熱中して自分を改める事を忘れて居つたら、其道は必らず奇麗な道が付かんのであります。それで人の心の掃除をする前に、先づ自分の心を掃除して淸水の樣に澄まして置いたら、神樣は心通りの守護をせられるのでありますから、必らず心通りの理が現れて奇麗な道が付いて來るのであります。然るに自分から急いだり慾の心を出して汚ない心になるから、道が付いてからも自分が苦しまねばならなくなるのでありますから、よく注意をせなければなりません。

□

屋敷と云ふのは云ふ迄もなくお地場の事を仰せられたのでありまして、此の屋敷を神屋敷と云つて神様の御鎭りになつて居る所であります。其所で此の屋敷の事を、神の屋敷神の支配神の儘と仰せになつた事があります。即ち此の屋敷は神様の支配に屬して居るので、此の屋敷から流される言葉は、皆な神様の意志が現されて行くのであります。そこで屋敷から打ち出す言葉は天の言葉であると仰せられたのであります。

此の事は御教祖の御在世の頃は、教祖の身體を神の社として神憑りになり、直接言葉をもつて神様の思召しを御取次ぎ下されたのでありますから、是の理を疑ふ者などはありませなんだ。次いで御本席が天の理を取次いで下さる時も、直接神様の御言葉が聞かれたのであります

から是れ亦惑ふ者はなかつたのであります。然るに御本席の死後は此の天啓の理が無くなつたのでありますから、御本部から仰せられる事を天の言葉と思はぬ者が、多少出來て來た樣でありますが、是れは非常な間違つた考へと云はねばなりません。

成程現在では神樣が直接御話がありませんから、人が集まつてする樣に思はれますが、前にも申しました通り屋敷は神の屋敷神の支配でありますから、人間の力では如何も出來ないのであります。そこで人間が談じをしても其の決は神が取つて居るのやと仰せになつた事があります。即ち人間が相談をしてもそれが決裁は神がして居られるのでありますから、相談の結果發表せられる事は、神樣が仰せられて居るのも同じ事になるのであります。

私等が事實本部の會議に列した上から考へましても、好い事でも成らず何んでも無い事でも纏ると云ふ樣に、殆んど豫測の出來ない樣な結果になる事が毎々あるのであります。是れ即ち神樣が蔭から御守護して居て下さる證據であります。

斯様な譯でありますからお地場から流される事は是非を論せず、神様の仰せであると思ふて其の通りに行はなければなりません。然るにお地場の理を思はず、其の言葉のみを考へて是非を論じたり不足に思ふ様になつたら、お地場から離れて行かなければなりません。又事實左様した心違ひから道を誤つた人々が澤山あります。是れ等は不足から自分で自分の根を切つた花の様なもので生きて行く道がないのであります。

そこで此の地場の理を恐れずあんな事と、お地場でせられる事を笑ふたら、自分があんな者と世界の人から笑はれねばならなくなるのであります。それは丁度女が白粉を塗つし人をだまそうとするから、自分が鏡にだまされて喜んで居る様なものでありまして、やがては又自分に歸つて笑ふだけ笑はれて通らねばならぬのであります。ですから道の者は如何なる場合にも、地場の理に添ふて行かなければならんのであります。

三歳の心と云ふのは小供の心を云ふのでありまして、其の子供の心と云ふのは如何云ふのであるかと申しますると、何か心に得心した事があればにこ〳〵笑つて居るが、自分の心に適はないと、所嫌はずに無理を云ふもので、是れが三歳の心であります。そこには何んの執着もなく何んの虚僞もなく、唯心に思ふた儘を行ひ、したい事をして少しの遠慮も氣兼ねもせないのが子供の心で、それを三歳の理と云はれたのであります。

神様は御本席の事を三歳の子供同様と仰せになりましたが、御本席の爲さる事はまるで子供も同様でありました。或る時などは本部員をまるで虫けら同様に、しかり付けられたのでありますが、其の翌日になつて昨夜は何んであんなに怒つたのやらうと、自分で不思議に思ふて居られたさうであります。又夜中でも氣が進むと起き上がつて、角力取の眞似をしたり唄を歌つ

て喜んで居られたのであります。その有樣はまるで子供の遊んで居るのと同じでありまして、少しの邪氣や惡氣は無かつたので、子供同樣と神樣も仰せられたのであります。

人間は皆斯うした三歲の子供の樣な心になつたら好いのでありますが、第一に人間には執着があります。子供は右向いて遊んで居た弄具を、左向いたらもう捨ゝ顧みないのであります。然るに人間は左樣淡白に物を捨てる事が出來ません。甚だしきになつたら十年も十五年も以前に、人から云はれた事でも忘れずに覺へて居ると云ふ樣であります。そして機會があれば復讐でも仕樣と云ふ樣な考へを持つて居るのであります。又た將來の事に付きましても、子供は今の事しか考へて居ないのに、人間は十年も二十年も行き先の事を考へて心配して居るのであります。斯樣に先の事まで考へて居て心が助かりさうな筈がないのであります。それ故神樣も一日の理は一日に治め、一夜の理は一夜に治めと仰せ下された事があります。

又生活上の上から考へましても、人間が此の世に生れて來た以上、親が子を育てゝ呉れる樣

に神樣が人間を養ふて下さるのでありますから、何んの心配もなく親を信じて居たら好いのでありますが、それが出來ずに我が力で、安心の地を見出さうとする結果、返つて自分が苦しまねばならぬ樣なものを、澤山造りあげて居るのであります。それで遂には神樣も信ずる事が出來ぬ樣になつて、自分を苦しめ拔いて居る人が世の中には到る處に澤山あるのであります。

又た子供は何んの虛僞もありませんが、人間は嘘ばかり云つて、却つて神樣の仰せられる處を嘘の樣に思ふて、眞の道を嘘の道にして居るのであります。だから三歲心になるには一切の物を捨てゝ、唯神樣に添はして貰ふと云ふ心になつて、何んの思案も何んの執着も無い樣になつて行かねばならんのであります。

□

地の底と云ふのは早やく云へば地獄と同じ事であります。地獄と云ふのは佛教の言葉でありまして、人間が死後此の世に於いて惡い事をして置いた者が、行く處とせられて居るのであります。そして其の地獄には大寒地獄だとか火熱地獄だとか云ふのがあつて、其所で人間が苦を受ける事になつて居るのであります。然し地獄と云ふのは死後にあるのではありません。教祖は地獄極樂は何處にあるとは思ふなよ、めい〳〵胸三寸の理にあると仰せになりました。

本教から申しましたら、地獄や極樂は死後の世界にあるのではなく、此の世が地獄であり、此の世が極樂であります。それが異ふと云ふのは人の心に相違があるからで、人が善であれば其の人には此の世が極樂であるし、心が惡であれば其の人には此の世が地獄になつて來るのであります。故に自分の心一つに依つて、地獄の住居も極樂の住居も、此の世に於いて出來るのであります。それで胸三寸の理にあると仰せられたのであります。

其所で泥だらけと云ふのは何んであるかと申しますると、御神樂歌に「慾に切りないどろ水

や」と仰せられた通り人間の慾が心の泥であります。そこで泥だらけで沈んでしまうと云ふのは、慾の心を出して其の泥で、自分の眞實が埋れてしまうのを云ふのであります。

廣い世界の人の心を見ますると、一日として慾の心なしに暮して居ない人はありません。少しでも多くの金を得たいとか、少しでも高い位を得たいとか、何かしら人間は慾を出して其の慾に引かれて暮して居るのであります。そして其の慾が滿たされて行くのを喜んで居るのであります。

それは丁度金を欲した者は、終いには金の爲めに、自分の身體や心を金で縛られて居るのでありますし、學問をした者は自分の智慧で我が心を縛つて居るのでありますし、地位を得た者は地位の爲めに自分の身や心を縛られて居るのであります。斯樣に自分のした事に自分が縛られて苦しんで居るのが泥だらけでありまして、それが次第〳〵に積つて如何もならない樣になつて來たらば沈んでしもうのであります。そして苦しむのでありまして、これは泥の中に落ち

込んだ者が、もがけばもがく程深い所に落ち込んで行くようなものであります。

斯様なれば其の人には此の世が少しも面白い所で無くなつて來るのでありまして、卽ち此の世が地獄になるのであります。故に泥だらけになつて沈まん中に、早やく光明の差す世界に出られるよう、神様の御助を頂かねばならぬのであります。

□

御本席が其子息に親の光りを出すは神の理やでと仰せられましたが、是れは道としては一般的に解釋すべきものだらうと思ひます。其所で親の光りと云ふのは、云ふ迄もなく生みの親兩親の事を云ふのでありまして、其の光りと云ふのは其の徳を表はすとか、其の名を擧げるとか云ふのが光りを出すと云ふのであります。それが卽ち神の理卽ち此の道の孝行であります。所

が道と云ふ上から考へまするとと、生みの親は假親であつて、神様が實神實の親であります。從つて道から云へば神の力を現はし、神の徳を世界に現はして行くのが、其の光を出すのでありまして、それが神の理となるのであります。

所が多く斯う云ふ事が實際問題として起るのであります。それは神の意志と兩親の意志とが、相反する時には何れに從ふべきかと云ふ事であります。然し神の意志は眞實でありますから、本當を云へば此の眞實に從はねばならぬのであります。眞實でない親の心に從ふのは、此の世一代から考へましたら、親孝行の様に思へるのでありますが、是れは却つて大なる親不孝となるのであります。

例へば親が惡るい事をしたいと思ふて居る時に、其の親の意志に從ふと云ふ事は、一寸考へたら好い事でありますが、それに依つて親の惡氣を增長させて行くのでありますから、却つて親に不孝をして居るのであります。是に反して親の意志に反して其の意志に從はなかつたら、

此の世に於いては不孝の兒となるかも知れませんが、それに依つて親の惡氣が少なくなれば、それだけ親孝行をして居るのであります。斯樣云ふ譯でありますから、人間は眞實の心を持つて通つたら、その結果親が苦しんでもそれは親を助けて居るのであります。

それのみならず人間が眞實の心で暮すと云ふ事は、生きて居る親に孝行である許りでなく、死んで居る親に是れ程大きい親孝行はないのであります。何故なら死後靈となつた親には、子供の一生が深い關係を持つて居るのでありまして、子供が惡氣な心を持つて此世に居たら、親の心は非常に苦しむのであります。それに引きかへ善良な眞實な心を持つて暮せば、親の心はそれで非常に安心するのでありますから、眞實の心は死後の親を助ける唯一の道であります。

更らに道を通る者の上から考へましたら、我々が眞實の心で此の世を通つて置く事が、未だ此の世に生れて來て居ない多くの人を助ける臺となるのであります。例へば御教祖が其の死後澤山の人を御助けになつて居る樣なものであります。故に親の光りを出すと云ふ事も、又眞實

に人を助けると云ふ事も、總て神の思召し通りの道を眞實の心で通るより外はないのであります。眞實の心で通つてそれが爲めに人が苦しむなら、それは苦しめて居るのでなく助けて居るのであると思はねばなりません。

□

此の道の話と云ふのは說き流しと云ふのであつて、丁度川の水が流れてゐるやうなもので、誰れだから斯う彼れだから斯うと云ふ事もなければ、又た如何せい斯うせいと云ふ樣な、命令がましい事は少しもないのであります。埃にした所が是非取らねばならんと仰せになるのではなく、心に當る所あれば懺悔をせよ、懺悔すればそれだけ神は守護をすると、仰せになつて居るのであります。されば是れ程自由な敎へはないのであります。

斯く教へは自由でありますが、そのかはりに心通りの守護と云ふ理があるのであります。悪るく思へば悪るく思ふた樣好く思へば好く思ふた樣に、其の人の心通りに守護せられるのであります。

ますから、懺悔して好い心を持たなければ、持たぬ者自身が困るのであります。それで神樣は無理に懺悔せよとも改めよとも仰せられぬので、困らぬ樣助かりたいと思ふ心があつたら、改めて行くより外はない事になるのであります。

斯くの如き教へでありますから、最も心を付けなければならない事は、自分の心使ひと云ふ事であります。如何に教理を聞いても其の心が悪るかつたら何にもならんのであります。其所で取り樣聞き樣一つの道となつて來るのであります。

取り樣聞き樣と云ふのは如何云ふ事であるかと申しますと、人から神樣の御話を聞かして頂いても、それを悪るい方に取つたら神樣は御話通りの御守護がなく、悪るい事が現れて來るのであります。それに引きかへ好い方へ取つたら話はたとへ下手な譯の分らぬ話であつても、其

の心通りの御守護をせられるから、我身の上に好い事が現れて來るのであります。それが聞き樣取り樣一つの心通りの守護となつて來るのであります。

所が世の中には何か聞いた刹那に、ふと悪るい前兆の樣な氣がして仕方のない事があります。それを多くの人は其の事が悪るいのだと思ふて居りますが、其の實自分の心が何を見ても好い方に取れない心が、既でにある事に氣が付いて居ないのであります。それだから心通りの理が現れて來るのであります。

故に悪い方に取れた樣な時には、それが好い方に取れるだけの理を、運ばねばならぬのであります。例へば人に頭を叩かれても、自分の心が人間一條の理に住んで居たら腹が立ますが、神一條の理に住んで居たら少しも腹が立たんのであります。すれば自分の心が人間心から神一條に進みさへすれば、頭を叩かれたのが何んでもなく、却つて感謝出來る樣になるのであります。

すから、斯樣に自分の心を改めて好い方へ取れる樣にして行かねばならんのであります。又た

神様は心の理が違ふただけ其の御守護も御變へ下さるのであつて、それでこそ助からぬ所も助かり、難儀な事や災難に出合はなければならぬ事も助かつて行くのであります。

□

人間が片手で持つて重くて持てないものでも、兩手をかけたら輕く持ちあけられるものである。是れは明らかな事でありますが、是れを人生に持つて來たら如何云ふ事になるかと申しますると、世の中で六ヶ敷い事と云ふても片手でして六ヶ敷いのであつて、兩手をかけたら何んでもなく出來る事があるのであります。世界で二足の草鞋ははけないと云ふ樣に、兩手で違つた事をすれば六ヶ敷いが、一方だけに兩手をかけたら樂に出來る事もあります。

此の道理から押して考へましたら、一人で出來ん事は二人でし、二人で出來ん事は三人よつ

てすれば出來る筈であります。例へば御助けに於いても、自分一人の願では助からん時は、多くの人に願ひをして頂き、多くの人の手でしたならば重い病人でも助かる道理である。故に以前は此の道は家内中の者が聞いて、心を治めねばならんと仰せられたので、一方で心を改めさして居ても、一方で泥を入れて居る樣では、何時迄たつても心の澄む時が無いから、共に話を聞かねばならんとせられて居たので、是れは全く多くの人の手に依つて、重いものでも持てば持てると云ふ所から來たのであります。

更らに此の事を今一歩進めて申しましたら、何事に依らず其の事に重い輕いと云ふ理はないのでありまして、要するに此方に力のあるか無いかに依て、其の物が重いものにもなれば輕いものにもなるのであります。其所で神樣は斯う仰せられた事があります。理を重うしたら身が輕うなる、理を輕ふしたら身が重うなると。是れから考へますると丁度人間の苦しみと、天の理とを量りにかけて居る樣なものであります。だから重い輕いは要するに理の重い輕いから生

じるのであります。

重い病人でも輕う助けさして頂こうと思ひ、困つた事でも樂に治めさして貰ふと思ふならば、何よりも天の理を重ふして行かねばなりません。天の理さへ重う取つて、自分に大きい天の理を背負ふて居たならば、我が前に出て來る事は何事も、輕く濟ませて頂く事が出來るのであります。所が多くの人等は此の天の理を少しも重う取らず、たゞ自分の苦しみは成るべく逃れる樣避ける樣にばかりして、重い理を輕うしたいとするのでありますが、是れでは成りそうな筈がないのであります。

反對に此の天の神が身に重くかゝつて居る人は理のある人と云ふので、此の理の力さへあれば人が見て重いものでも輕く見えるのであります。だから物の重い輕いと云ふ事は向ふにあるのではなく、此方にあるのでありますから、此方の力を出す事に勤めなければならんのであります。斯うすれば三人の所が二人で、二人の所が一人で出來る事になるのでありますから、何

んでも此の道は理を重く取つて向ふを輕ふする樣にして行かねばなりません。

□

神樣の御守護と云ふものは、丁度天から降る雨の樣なもので、何處に隔てなく何時も人間の上に降つて居るのでありますが、其れを受けるものが無かつたら、其の水は流れてしもうのであります。人間が兩手を受けて頂いたら、其の中に水がたまる樣に、天の理も心で受けたら受けられるのであります。所が指を合はさずに開いた儘で受けたら水が流れ出す樣に、天の理も心に隙があつたら御守護が流れてしもうのであります。

故に心に隙の無い樣にして、御守護を受ねばならんのでありますが、其の隙と云ふのは何んであるかと申しますると、人間の好き勝手の心であります。即ち人間が彼れが好き是れが嫌いと

云ふのは、要するに心に隙のある證據でありまして、此の隙があるのは兩手を開いて、物を受けて居るのと同じであります。其所で其の好きの心を捨てゝしまはねば、神樣の御守護を十分に頂く事は出來ないのであります。それが水も漏れん樣に十分運ぶのでありまして、左樣したならば神樣の御守護が自然に天より降つて、兩手に水がたまる樣に神樣の理が、心に下つて來るのであります。

以上は人間個人の心に付いて云ふたのでありますが、是れを大きく取つて考へたら、家庭なども此の通りであります。一つの家庭に居る人々の心が、銘々勝手の理ばかりを先に立てゝ、一手一つの心にならなんだら、丁度指を開いて隙だらけで、天の理を受けようとして居るのと同じでありまして、斯う云ふ家庭には決して天の理は下らぬのであります。從つて不思議な神樣の御働きもなく、日々困つて暮すより外道ない事になるのであります。

斯樣云ふ譯でありますから、家庭の主人は云ふ迄もなく、主婦も子供もめい〳〵の勝手な心

を少しも出さん樣にして、一手一つに心を結ぶ樣に勤めねばならんのであります。一手一つに結んだら、何處に隔てはない神樣でありますから、自然御守護を下されて、家が榮えて行くのであります。家が榮えたならば家族は皆結構になるのでありますから、何事も理に從ふ心になつて、一手一つに結んで呉れたら、神が守護すると仰せになつた通り、心に隙の無い樣勝手を出さぬ樣にして行かなければならんのであります。

又是れを物事を運ぶ上に付いて考へましても、心に隙があれば事に隙が出來、それから折角の事も破れる樣になるのでありますから、隙のない樣にして行けば、自然水も漏れん樣になつて來るのでありまして、神の守護が添ひ運ぶ事が成就するのであります。

□

未信者の人に此の道を傳へるのを匂ひ掛けと云ふのでありますが、匂ひ掛けと云ふ以上匂ひの無い者に、此方にある匂ひを掛けるのであるから、其の匂ひは何時迄も匂ふて居るべき筈はないのであります。然るにお道では此の匂ひ掛けと云ふ事が、非常に重大視されて居つて、一度此の道を聞かされた人を匂ひの親と云ふて、何時迄も其の關係を保つて行く樣になつて居るのであります。

是れは一面非常によい風習でありますけれども、此の結果又た往々誤つた事も生じるのであります。例へば匂ひである以上一度かけた匂ひは、暫らくすると消てしもうべき筈であるが、それを思はず一度掛けた匂ひを何時迄も、自分に先取權があるものゝ如く考へる事であります。その結果其の者が他日他の人から、改めて匂ひを掛けられ信者となつて、信仰を進めて來た時に、自分が初め匂ひを掛けたのであると云ふ理由の下に、其の信者を自分の所屬に歸せしめやうとする樣な、横暴な考へを起して信者の取りやいを始めるのであります。

然し是れは實に間違つた考へであつて、例へば自分が生んだ子を捨子にして置いて、他日人が拾つて立派に育てた者を、自分の子であると云ふ理由の下に、取り返へさうとするのと同じであります。世界にて生みの親より育ての親と云ふ事があります如く、神樣も修理して造りあげてこそ、我が物であると仰せになつて居ります。故に自分が捨てゝ置いたものに對しては、決して慾望を起さぬ樣にせなければ、それが爲めに却つて當人の信仰を、根本から誤たしめる樣な事が生じるのであります。

以上の樣な譯であるから匂ひが掛つたならば、其の匂ひがある内、それは其の人の心にお道に對する、興味を持つて居る間を云ふのであります、其の間に理を結んでしまはねばならぬのであります。理を結ぶと云ふのは講社ならば講社にしてしまふ事であつて、即ち匂ひを掛けた目的を達してしまふことを云ふのであります。それを直ぐにせないと後に本人の爲めにもならず、此方の爲めにならぬ樣な事が出て來るのであります。

私しの父が御本部の御普請の時に、或る金持の所へ招待されて行つた事があります。其の席上世界並の話しを卅分あまりして歸つて來た。所が後から其の人が三萬圓御寄附申し上げると云ふて來たのであります。それで當該教會長に受取らしにやつた所が、一萬圓だけ貰つて、二萬圓だけ先方の名で、銀行へあづける事にしたのであります。その爲めに終ひにはその二萬圓と云ふ金を、御本部へ寄附する事が出來なくなつたのであります。

是れは卽ち匂ひのある間に、半分より理を結ぶことが出來なかつたのであります。何故なら後に匂ひが消えてしまつたからであります。故に匂ひを掛けた以上、其の理を結ぶまで運ばねばならぬのであります。

□

一家の內にしましても一身の上に付ても、時々事情が生じるものであります。その事情と云ふのは多くは、誤解や意志の違ひから生じるのでありますが、是れを治めるには其の實を聞いて、治めて行かねばならぬのであります。其實と云ふのは本當の心、若しくば僞りのない心を云ふのでありまして、其の心から治めて行つたら、必らず事情は治まるべきものであります。然るに世界に於いては是れを見ずに、唯言葉を聞いたり事柄を見て治めるから、治まらぬ樣になるのであります。

例へば夫婦喧嘩をして歸らすの歸るのと云ふて爭つて居りますのを、若し言葉だけの理をもつて治めたら、離婚せしめるより外はないのであります。然るに實際其の心になつて考へたら、歸へす意志もなければ歸る意志もないのであります。唯其の場の行きがゝり上、左樣云ふて居るのでありますから、其の心をよく見分けて治めなければ、却つて後に恨まれる樣な失態をせなければならぬのであります。故に言葉や事柄などから治めにかゝらずに、よく人の心を見分

けて、其の心から治まる樣に諭しもして行かなければならぬのであります。

是を教會などの樣な團體の上から考へましても、樣々な事情が生じた場合、會長なり役員なりの心を、よく見分けて治めねば治まらぬのであります。例へば或役員が會長や役員の事を、惡く云ふて居ると云ふ樣な場合に、表面から考へたら會長や役員に缺點があるに違ひないが、それを喧しく云ふのには、其處に自分の欲する所がある樣な場合があるのであります。卽ち其の心の底を尋ねたら、自分が役員になりたいとか斯うされたいとか云ふ樣な考へが、心の底にあつて、それが自分でも知らず〳〵の間に働いて、人々を惡るく云ふて居る樣な場合が澤山あるのであります。左樣云ふ時に其の心を知らずに治めたら、何遍やつても同じことになるのであります。

斯樣に人間と云ふものは自分の爲てゐる事や思ふて居る事が、もつと深く考へたら、其の奥に大變な事が秘められてあることがあるのであります。そしてその心が樣々に働いて、事情を

引き起こして來るのでありますから、それを見分けて行かなければならぬので、それを實を聞くと云ふのであります。

例へば一家の内にしましても、我家の榮えるのを望まぬものはありません。是の點から考へたら皆一致してゐるのでありますが、さて如何して榮えささうと云ふ段になると、皆考へが違ひます。それで其の間に意見の違ひや誤解が生じて來て、終ひには相爭ふに到るのであります。然し其の根本の心に立ち歸つて考へたらば、決して爭ふべき性質のものではありません。その事柄や言葉などに囚はれて居るから、本當の人の心を見失つて爭つて居るのでありますから、其所をよく見分けて治めてさへ行けば、必らず得心が行つて治まるに相違ないのであります。

□

眞實と云ふものは續いてなければ眞實とは云へぬのであつて、續いてないものは一つの善い行ひ、又は善い心と云ふことは出來ても、眞實とは云はれぬのであります。所が神樣は眞實でなければ御働きがないので、其の眞實になるには變らぬと云ふ條件が付かなければなりません。單に一時的な其の場だけの理では、如何にそれが立派な心を定めても、それは眞實ではないから、神樣の御守護を受ける事が出來ないのであります。

尙ほ是れを分る樣に具體的に申しましたら、事情や事柄を土臺にして考へた心は、神樣に受取つて頂けないと云ふ事になるのであります。是れを病氣に付いて見ましても、病氣が助けて貰ひたい爲めに、如何に立派な心を定めても、それは神樣に受取つて頂く事が出來ないのであります。何故なら病氣が癒り苦痛が去ると共に、其の心も何時とはなしに失はれて行くからであります。斯うした心は如何に立派でありましても、それは永續きがしませんから、眞實ではない其の場限りの理となつてしまうのであります。

すれば如何すれば好いのであるかと申しますると、理を聞いて理の上から定めた心なら眞實となるのであります。理と云ふものは昔も今も變らぬのでありますから、理の上から定めた心には間違ひのあろう筈はありません、從つて神樣も御守護下さるのであります。だから病氣の場合に於いても病氣そのものゝ助かりたい爲めに、定めた理は何んの役にも立たないので、理をよく聞き分けて理の上から治める樣にして行かねばなりません。すれば病氣の助かる助からぬと云ふ事は第二になつて、心を改めると云ふ事が第一になつて來るのであります。そして心の改まる理に依つて、神の守護が現はれて來るのであります。

是れは單に病氣の場合に於てのみではありません。布敎をする時でも重い病人があるから、斯う云ふ心定めをするとか、困つた事が出來たから斯う云ふ心を決めよとか云ふて居る人があります、是れは其の根本に於いて間違つて居るのであります。其の爲めに浮草の樣な心持ちで自ら苦しんで居る人が澤山あります。故に事や場合に於いて心を定めたりせずに、人間とし